史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)調査報告

～史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)保存整備事業に伴う発掘調査報告書～

１９９３年３月

善通寺市文化財保護協会

序

善通寺市有岡地区には、古墳時代全時期にわたり築かれた数多くの古墳が確認されており、全国的にみても有数の古墳地帯であることが知られています。

中でも王墓山古墳・野田院古墳・磨臼山古墳・鶴ガ峰４号墳・丸山古墳・宮が尾古墳の６基の古墳は当地域における歴代の首長墓であり、４世紀から６世紀にかけて築造された県下を代表する個性的な古墳として国の史跡指定を受けております。

このうち、王墓山古墳は昭和61年度から平成３年度までの６年間にわたる保存整備事業を終え、築造当時の偉容を取り戻すことができ、そして本年度からは、事業の場が線刻壁画で有名な宮が尾古墳に移されました。

宮が尾古墳は石室が地中深くに残ることから、湧水による壁画の損傷が懸念されておりましたが、漸く保存のために科学の手が差し伸べられることになりました。

また、これまでの研究活動を通して、宮が尾古墳の壁画の中に、古代人の精神文化の一面を解明することができましたので、これを機に壁画を一般に特別に公開いたしましたところ、県内外から三千人もの考古学ファンが当地を訪れました。

古代遺跡に対する人々の関心の高さに改めて驚きを覚えるとともに、このような文化遺産を保存し、後世に伝える責務の重さを痛感した次第であります。

このたびの報告書刊行にあたり、ご指導をたまわりました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者、及び御協力頂きました関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成５年３月31日

善通寺市教育委員会
教育長　勝田英樹

第１図　宮が尾古墳横穴式石室（羨道から玄室を望む）

第２図　宮が尾古墳玄室奥壁の線刻壁画（部分）

例　　言

1. 本書は、善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存修理事業に伴い実施された発掘調査報告書である。

2. 史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存整備事業は、昭和61年度から平成3年度までの6カ年間継続して実施された史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業からの継続事業である。

3. 本年度事業は保存整備事業の前段階の発掘調査を中心に、平成4年7月13日から平成5年3月31日まで実施された。

4. 本事業の組織は本文中(30頁)に別記した。

5. 本書の編集作成は善通寺市教育委員会文化振興室主事笹川龍一が行った。

6. 補助事業の中で実施された、横穴式石室の実測や墳丘周辺部の測量調査及び遺物の実測は四国学院大学考古学研究会の協力を得て笹川が行った。

7. 本事業及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。また、調査期間を通じても多大な御指導、御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

坪井清足、石野博信、町田　章、内田昭人、松本豊胤、吉田重幸、丹羽佑一、
東　潮、葭森健介、高重　進、曽根正人、藤原茂樹、八重樫直比古、松浦　修、
新池功成、橋詰清孝、平塚　仁、奈良国立文化財研究所、香川大学、
香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、空間文化開発機構、
東亜道路工業株式会社、四国学院大学考古学研究会

目　　次

序（1頁）・カラーグラビア（3頁）・例言（5頁）・目次（6～7頁）

第一章　遺跡周辺の地理と歴史 …… 8

第二章　調査の概要 …… 14
　① 調査に至る過程 …… 14
　② 墳丘周辺地形測量調査の実施 …… 16
　③ 墳丘発掘調査の実施 …… 18
　④ 横穴式石室の線刻壁画について …… 21
　⑤ 出土遺物について …… 29

第三章　保存整備事業の展望 …… 30

第四章　線刻壁画の意味 …… 31

第五章　ま と め …… 42

挿　図　目　次

第 1 図　宮が尾古墳横穴式石室 …… 3
第 2 図　宮が尾古墳玄室奥壁の線刻壁画（部分） …… 3
第 3 図　善通寺市遠景 …… 8
第 4 図　調査地と周辺の主要遺跡 …… 11
第 5 図　宮が尾古墳位置図 …… 15
第 6 図　宮が尾古墳周辺地形実測図 …… 16
第 7 図　墳丘断面実測図 …… 17
第 8 図　墳丘周辺土層模式図 …… 19
第 9 図　土留擁壁標準断面図 …… 20
第10図　横穴式石室実測図① …… 22
第11図　横穴式石室実測図② …… 23
第12図　横穴式石室床面実測図 …… 24

第13図　玄室奥壁壁画実測図 …… 25
第14図　玄室西壁武人画実測図 …… 28
第15図　武人画実測図 …… 28
第16図　玄室東壁不明壁画実測図 …… 29
第17図　副葬品実測図 …… 29
第18図　線刻壁画の共通モチーフ（殯屋）実測図 …… 31
第19図　夫婦岩１号墳石室実測図 …… 32
第20図　夫婦岩１号墳天井壁画実測図 …… 33
第21図　夫婦岩１号墳玄室側壁壁画（家）実測図 …… 34
第22図　殯の残存形態 …… 35
第23図　県下の装飾古墳一覧 …… 36

図　版　目　次

第24図　夫婦岩１号墳の天井壁画 …… 37
第25図　夫婦岩１号墳玄室壁画・部分（殯屋Ａ） …… 37
第26図　岡５号墳羨道壁画・部分（殯屋Ａ） …… 38
第27図　岡５号墳羨道壁画・部分（殯屋Ｂ） …… 38
第28図　鷺の口１号墳玄門部壁画（樹葉Ｂと殯屋Ｃ'） …… 39
第29図　綾織塚羨道部壁画（樹葉Ｂ） …… 39
第30図　岡11号墳羨道部壁画（樹葉Ｂ） …… 39
第31図　綾織塚羨道部壁画（殯屋Ｅ） …… 40
第32図　岡11号墳玄門上部壁画（殯屋Ｅ） …… 40
第33図　岡11号墳羨道部壁画（樹木Ａと樹木Ｂ） …… 41
第34図　岡５号墳羨道部壁画・部分（忌垣と殯屋Ｃ） …… 41
第35図　宮が尾古墳遠景 …… 45
第36図　宮が尾古墳開口部上部の覆屋と周辺の状況 …… 45
第37図　第１トレンチ完掘状況・全景 …… 46
第38図　第２トレンチ完掘状況 …… 46
第39図　第３トレンチ完掘状況・全景 …… 47
第40図　第３トレンチ完掘状況 …… 47
第41図　ボーリング調査作業風景 …… 48
第42図　石室内樹脂除去試験作業風景 …… 48

第一章　遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層 70 ～ 80 ㎝が強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

第３図　善通寺市遠景　（山塊の背後が古墳地帯であり、手前に集落遺跡が広がる）

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、機内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2～3㎞を計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5ｍあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稲木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壷棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壷・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行なわれたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600ｍ程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘

調査が実施されたが、ここでは約1,500㎡の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居跡・小児壷棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが発見され、特に弥生時代終末期の竪穴住居跡からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏃・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壷棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居跡や小児壷棺墓・箱式石棺等が確認されている。

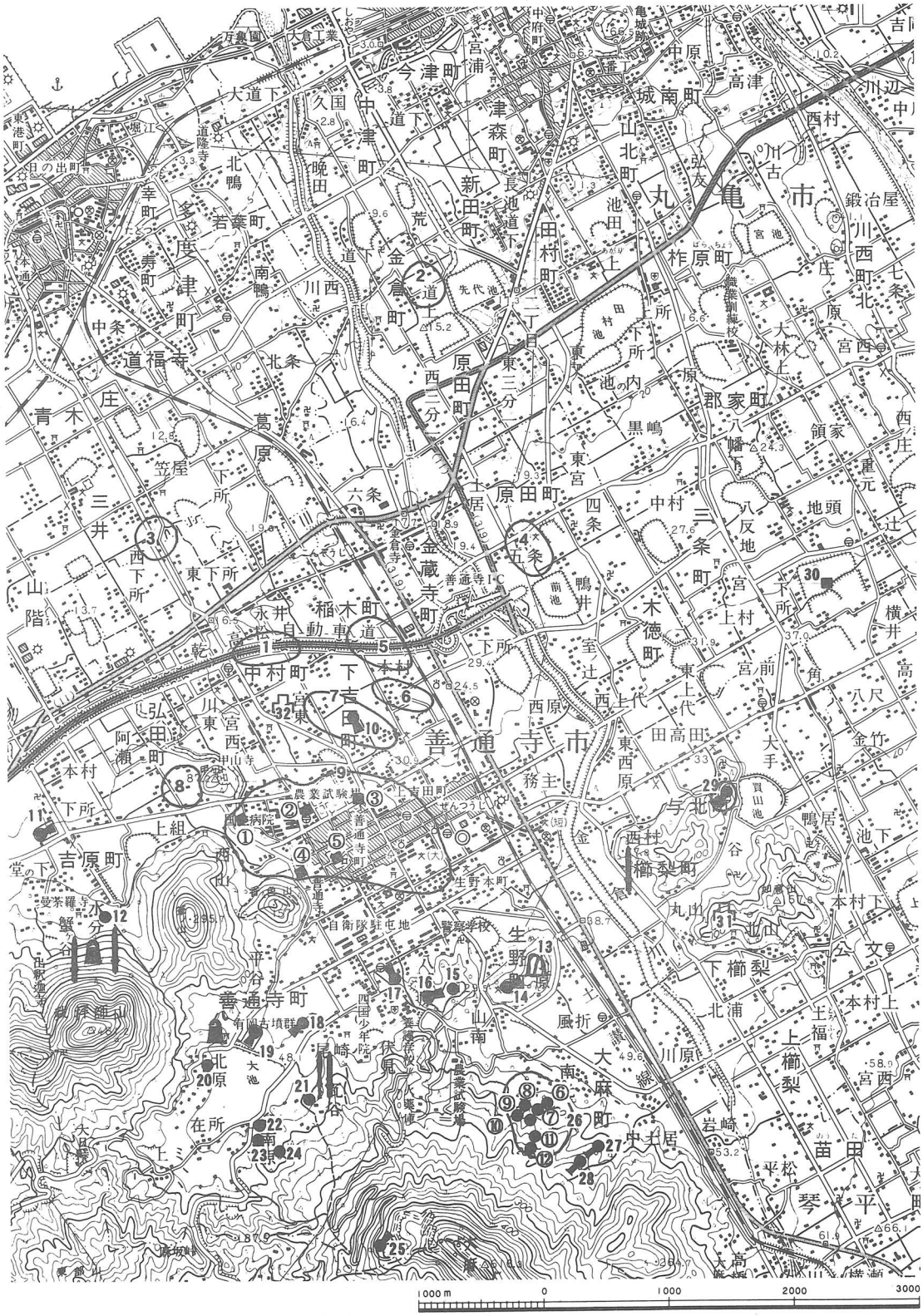
九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

ここから北方に隣接する稲木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみるといずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉾1口の計8口、我拝師山遺跡では計3カ所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

1. 永井遺跡
2. 中ノ池遺跡
3. 三井遺跡
4. 五条遺跡
5. 稲木遺跡
6. 石川遺跡
7. 九頭神遺跡
8. 甲山北遺跡
9. 旧練兵場遺跡群
 ①彼ノ宗遺跡
 ②仙遊遺跡
 ③仲村廃寺(白鳳)
 ④善通寺西遺跡
 ⑤善通寺伽藍(奈良)
10. 下吉田神社古墳
11. 青龍古墳
12. 大塚池古墳
13. 磨臼山祭祀遺跡
14. 磨臼山古墳 史
15. 鶴ノ峰山頂古墳
16. 鶴ノ峰4号墳 史
17. 丸山古墳 史
18. 王墓山古墳 史
19. 菊塚古墳
20. 北原古墳
21. 瓦谷1号墳
22. 御館神社古墳
23. 宮ノ尾古墳 史
24. 宮ノ尾2号墳
25. 野田院古墳 史
26. 岡古墳群
 ⑥岡5号墳
 ⑦岡6号墳
 ⑧岡10号墳
 ⑨岡11号墳
 ⑩岡13号墳
 ⑪夫婦岩1号墳
 ⑫夫婦岩2号墳
27. 大麻山椀貸塚
28. 大麻山経塚
29. 陣山古墳群
30. 宝幢寺跡(白鳳)
31. 櫛梨城跡(中世)

:銅鐸出土地　:銅剣出土地　:銅矛出土地



第４図　調査地と周辺の主要遺跡（1:50,000）

古墳時代に入ってもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を超える古墳が存在し、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山１号・２号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山２号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405ｍ）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方部盛り土後円部積石墳である。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鑵子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴ガ峰２号墳（消滅）・鶴ガ峰４号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計８基確認されており、様々な点で興味は尽きない。

この頃の人々の生活の場は、後期を中心とした弥生時代の集落域と重複しており、旧練兵場遺跡をはじめ、善通寺市街地から北に広がる水田地帯で数多くの集落遺跡が確認されており、有岡地区を中心に各地に立派な古墳群を残した集団と各集落との関係が注目されている。

古墳時代になると弥生時代に開始された稲作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が独自の技術により灌漑治水事業等を行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者として生まれ変わり、有岡地区一帯に数多くの古墳を築いたが、この権力者（豪族）層は奈良時代には貴族層に変る。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村廃寺（伝導寺跡）が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、その際に500ｍ程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末頃佐伯氏に弘法大師（空海）が誕生したことによって、平安時代から室町時代にかけては門前町として栄え、鎌倉時代から室町時代初期にかけて寺院の最盛期を迎え、

地名も寺名そのまま善通寺村となるが、戦国時代には殆どの寺院は焼失してしまう。

寺社の復興は江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからであり、この頃四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となる。

明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道網が整備された。そして善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村と合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年 7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年 3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年 3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年 3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年 3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年 3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年 3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年 3月
『稲木遺跡』	稲木遺跡発掘調査団	1989年 3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年 3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年 3月

～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書～

『中村・乾・上一坊遺跡』	第一冊	香川県教育委員会	1987年 3月
『矢ノ塚遺跡』	第三冊	香川県教育委員会	1987年10月
『稲木遺跡』	第六冊	香川県教育委員会	1989年 3月
『永井遺跡』	第九冊	香川県教育委員会	1990年12月

第二章　調査の概要

① 調査に至る過程

史跡有岡古墳群の保存整備事業は、昭和57年3月11日付けで地元の開発業者から市教育委員会に対して出された王墓山古墳が所在する小丘の宅地造成計画の届け出に端を発している。これを機に緊急発掘調査が実施され、県下で初めて前方後円墳から横穴式石室が発見された。しかも、玄室内部には四国唯一の石屋形をはじめ、金銅製の冠帽や馬具等、豪華優美な副葬品で満たされていた。

王墓山古墳が所在する有岡地区には400基を超える古墳の存在が確認されているが、この発掘調査の結果が高く評価され、周辺に残された同一系譜上の首長墓と考えられる5基の前方後円墳（王墓山古墳・野田院古墳・鶴が峰4号墳・磨臼山古墳・丸山古墳）と、線刻壁画を持つ宮が尾古墳、計6基が有岡古墳群として昭和59年11月29日に史跡指定を受けている。

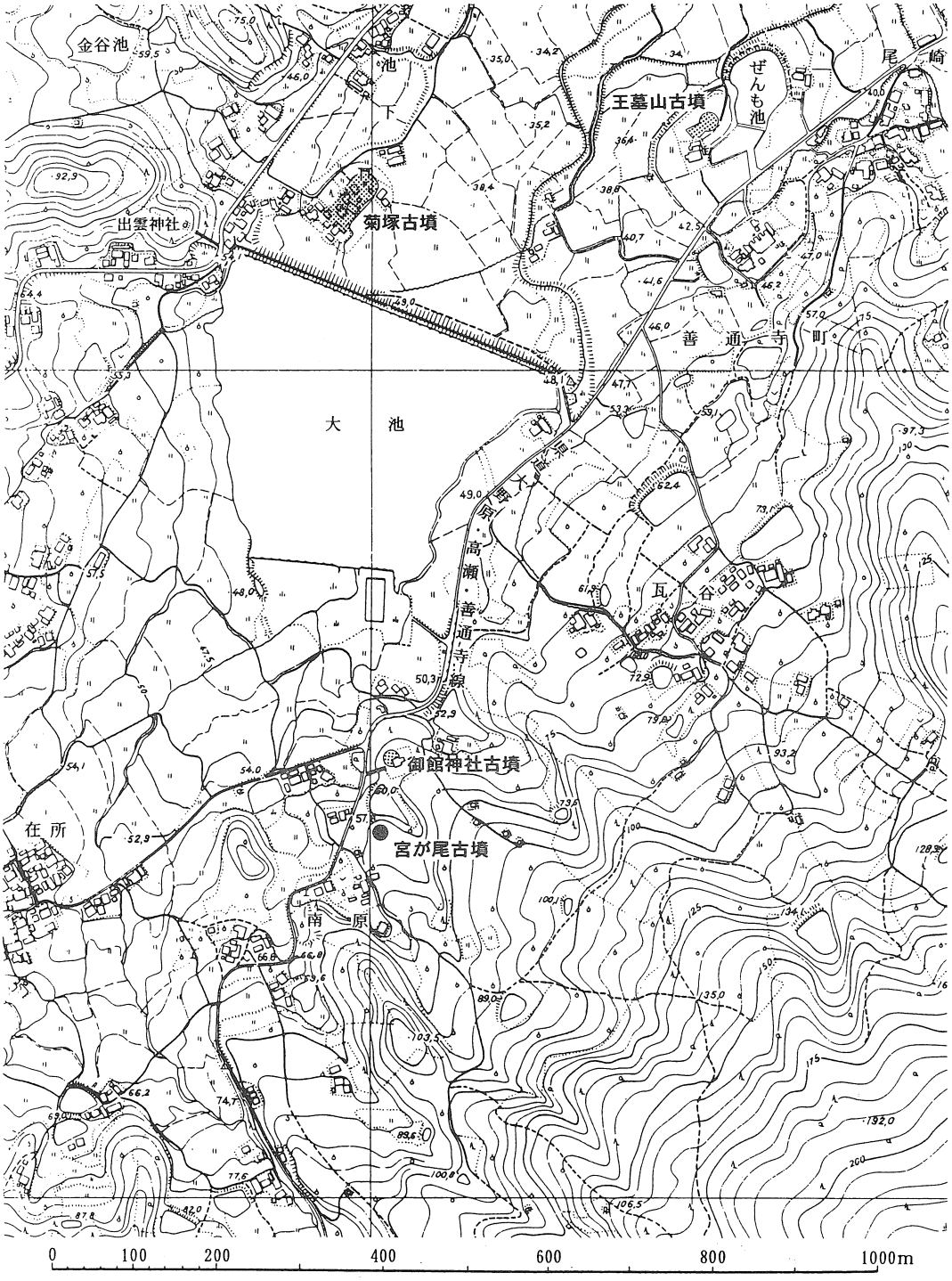
王墓山古墳では公有地化された後、昭和61年度から平成3年度までの6年間に亘る整備事業が行われたが、この事業中にも調査整備委員会において、宮が尾古墳の壁画の傷みに対する保存事業の緊急性が論議されており、早急な保存措置が望まれていた。

宮が尾古墳は昭和41年、山林の開墾中に確認された後期古墳であるが、一般的なものとは異なり全体が地中に遺存していたため、横穴式石室内は雨水で満たされていた。緊急発掘調査は松本豊胤氏（現香川県埋蔵文化財センター所長）により実施され、盗掘等により副葬品は失われていたものの、玄室奥壁画を中心に夥しい線刻壁画が描かれていることがこの時確認され当時の新聞紙面等を賑わせ、昭和43年6月4日、県史跡に指定された。

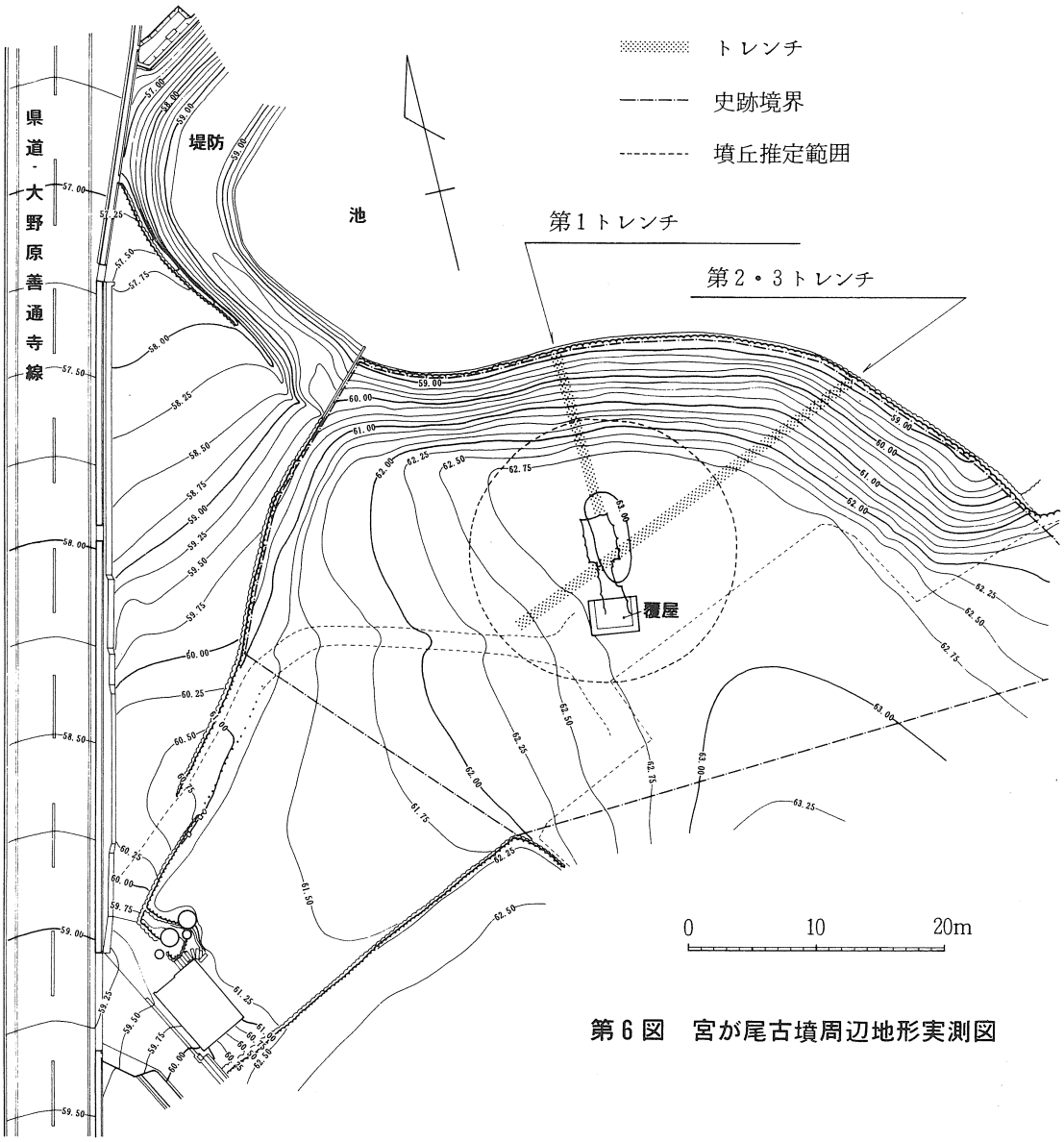
宮が尾古墳は現状での保存が可能であったため、当時の調査は石室内部を中心に行われ墳丘全体の構造を把握する調査は実施されていないが、調査後、地中の横穴式石室内への雨水の流入防止を目的に石室上部をアスファルトの防水層で覆い、羨道先端の入口をコンクリートで固定し、この上に覆屋が設置されている。石室内部においても羨道の一部の変形部分はモルタルで補強され、また主要な壁画面と天井以外は石材表面に保護用の樹脂が塗布され、石の隙間にはモルタルが詰められ、現在に至っている。

壁画保存のために密封された地中の横穴式石室は年間を通して湿度が極めて高く、夏は一時的に壁画が乾燥するものの、その他の時期は壁画に多量の結露が生じている。そして天井部分には白色のカビが発生し、しかも梅雨時期等、多量の降雨時には石室内部が20㎝浸水する環境にあり、壁画の風化損傷が懸念されていた。

そこで、王墓山古墳整備事業の完了時に、文化庁、香川県教育委員会と協議の上、史跡有岡古墳群調査整備事業の一環として、引き続き宮が尾古墳に対する保存整備事業実施の可能性を前提とした湧水の原因究明、史跡範囲の確認等を目的とした調査を行うことを決定した。



第５図　宮が尾古墳位置図

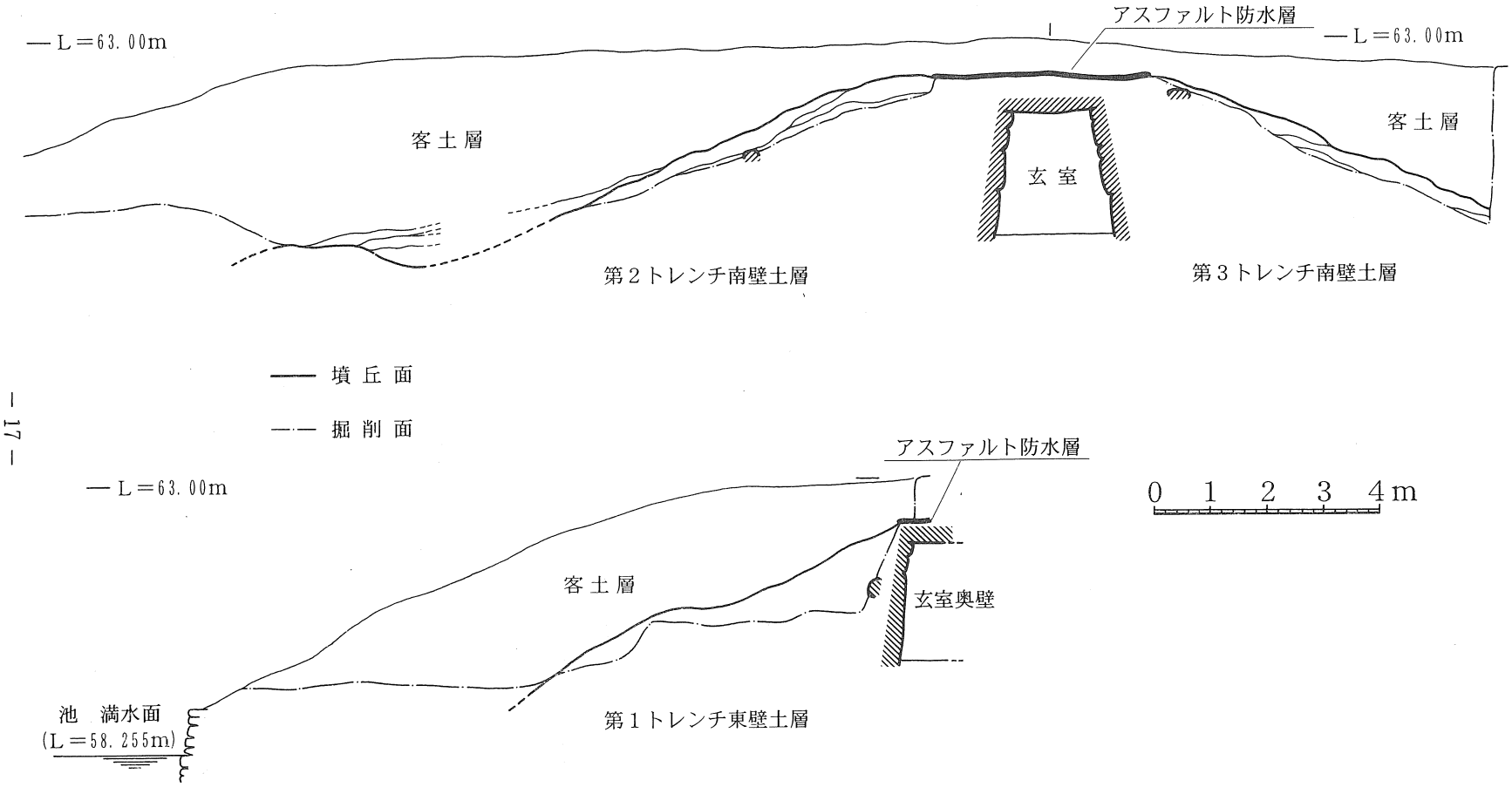


第6図　宮が尾古墳周辺地形実測図

② 墳丘周辺地形測量調査の実施

史跡有岡古墳群の管理団体は善通寺市教育委員会であるが、宮が尾古墳は地権者である新池功成氏の協力のもとに保存管理されている。当該地周辺は果樹園として開墾され、史跡指定範囲内も蜜柑とキウイが栽培されており、史跡指定前にキウイ棚やスプリンクラー等の管理施設が数多く設置されているが、施設の基礎は浅く、遺跡に対する影響のないと思われる範囲内で設置されている。

地形測量は史跡指定範囲内を中心に、今後の土地利用の策定や石室内の湧水原因究明のため、隣接する県道や溜池等を含めての地形測量を実施したが、繁茂する果樹や関連施設


アスファルト防水層
—L＝63.00m
—L＝63.00m
客土層
客土層
玄室
第2トレンチ南壁土層
第3トレンチ南壁土層
—— 墳丘面
—·— 掘削面
アスファルト防水層
—L＝63.00m
0 1 2 3 4m
客土層
玄室奥壁
池 満水面
(L＝58.255m)
第1トレンチ東壁土層

第7図 墳丘断面図

を避けながらの作業は困難を極めた。

古墳周囲の平坦地形は人為的に土地が改変されて造り出されたものである可能性が高いと判断され、これを確認するためのトレンチによる掘削調査に取り掛かった。

③　墳丘発掘調査の実施

地形測量の後、墳丘の形状や規模を探るトレンチによる掘削調査を開始した。

当初の計画では石室の主軸方位及びこれと直行する方位に併せたトレンチの設定を計画し、これにかかる果樹は伐採する予定で地権者の了解は得ていたが、調査時期が蜜柑の収穫時期の直前であり、大きな果実を実らせた果樹を伐採するには忍びなく、トレンチの位置を変更することとした。幸いに蜜柑の植栽は規格的に行なわれており、直線的なトレンチの設定が可能であった。

トレンチは3箇所に、それぞれ幅1mで統一して設置した。第1トレンチは石室の主軸方向に併せて北側に南北方向に、第2トレンチは石室の中央部から東側にほぼ東西方向に設置し、第2トレンチを西側に延長したものを第3トレンチとした。

その結果、第7図に示したように、円墳が厚い客土で人為的に埋められていることが判明したが、客土は花崗岩の風化に伴う礫混り砂の二次堆積物であり、トレンチの壁画は掘削中にも次々と崩落した。特に深く掘削した部分では大変危険な状態となり、第2トレンチでは墳裾と周溝底部の検出直前に全体が崩落し埋没してしまった。

しかしながら、この時点までに墳丘の概要は大体把握できたと判断し、危険を回避するためトレンチを直ちに埋め戻し掘削調査を終了した。

また、調査期間中、関心を持つ地元の方々が現地に頻繁に足を運び、中には土地が改変される以前の状況を記憶している方もいた。このような証言を発掘調査結果や現況と総合し、地形改変前の概況が次のように想定された。

宮が尾古墳は大麻山裾部に突出した尾根の先端の比較的平坦部に構築され、北側は崖状地形となっていた。昭和初期頃までに墳丘北側は玄室奥壁付近まで崩壊しかなり痩せていたが、他の部分は比較的よく残っているようである。ただし石室内部から見て、開口部は積石が崩れ、かなり変形しているようである。そして昭和初期頃に周辺の開墾が始まり、これに伴い必要となった農業用水を確保するため古墳北東側の谷部に堆積した土砂を浚渫し、溜池を構築する作業が行なわれた。その際、宮が尾古墳周辺に運び上げられた土砂の量は膨大なもので、これは最終的に墳頂部の高さにまで盛られ墳丘は完全に姿を隠し、周辺の住民も次第に忘れ去る結果となった。このことは発掘の結果からも証明できる。

整備方針についてであるが、古墳本来の形状を復元するためには墳丘上及び周辺の客土を除去する必要があり、その際には墳丘南西側及び北側に擁壁が廻ることになる。しかも部分的に大きな擁壁の設置が予想された。このことは調査期間中に実施された調査整備委

員会（組織：30頁参照）でも論議され、将来的に構造物が設置される可能性を考慮したボーリングによる地質調査を実施することとなった。発掘調査結果だけでは不明な遺構面下の地質や強度を確認するためである。

地質調査の結果は以下のとおりである。

調 査 結 果

(1) 地形・地質概要

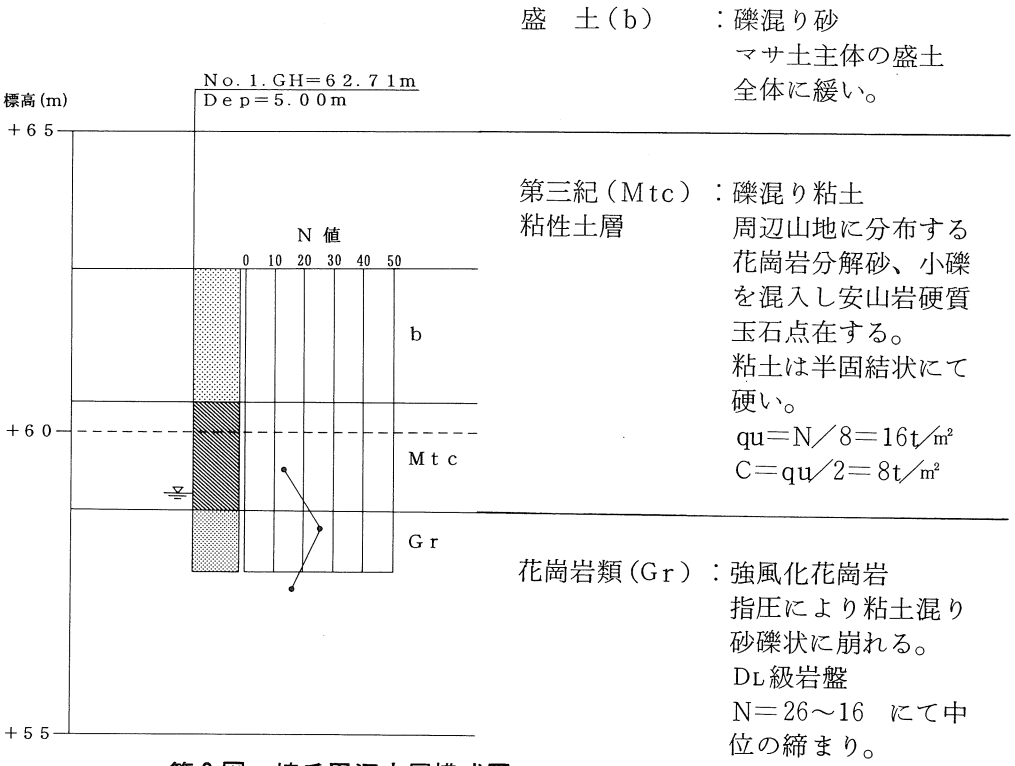
調査地は、善通寺市役所より南西へ約3㎞に位置する宮が尾古墳隣接地である。

宮が尾古墳は国史跡指定を受けた「有岡古墳群」の1つで、大麻山（標高616.3m）と我拝師山（標高481.2m）に南北を挟まれた谷部の南側低丘陵上に6世紀後半に築かれた後期古墳である。

現在、本古墳は近傍の溜池浚渫土を利用した客土層によって埋没されている。客土層直下の地質は、上位より第三紀鮮新世の三豊層群及び基盤部を成す中生代白亜紀の領家花崗岩類である。

(2) 地質構成

地質構成の概略は、下記柱状図・推定地質断面図の通りである。



第8図　墳丘周辺土層模式図

(3) ま と め

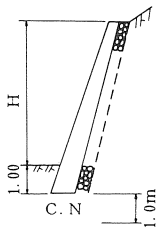
宮が尾古墳は現在盛土（客土）によって埋没している。古墳中央の石室から南へ約15mの地点で盛土は約2.2m分布する。盛土直下は半固結状の硬い粘性土層（三豊層群）が層厚1.8m、さらに下位には強風化花崗岩（D_L級）が分布する。いずれも擁壁基礎の支持層として期待できる。

土構物設計標準での土留壁（擁壁）は、切取り部で切取り面が自立するとともに、斜面全体の安定が確保出来る場合のみに使用するものとしている。使用できる高さと支持地盤の条件を下表に示す。

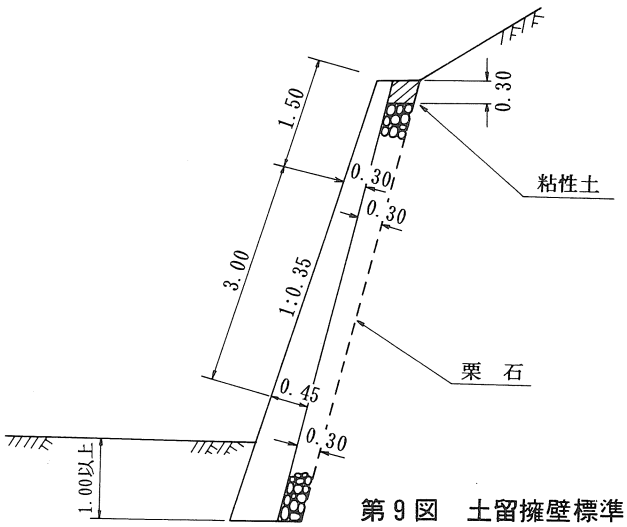
ただし、土留壁高Hに対して支持地盤条件が満足されない場合、底部を拡幅したり根入れを深くすることによって使用可能である。

以上、調査結果を参考に構造物の規模・付近の環境等を考慮の上、設計・施工の検討をする必要がある。

土留壁高と支持地盤条件

H(m)	支持地盤の地質		備　　考
H≦10	岩		
H≦8	粘　性　土　（t／m²）	砂質土	
	C≧7〔C≧69KN／m²〕	N≧30	
H≦6	C≧6〔C≧59KN／m²〕	N≧25	
H≦4	C≧4〔C≧39KN／m²〕	N≧20	
H≦2	C≧3〔C≧29KN／m²〕	N≧10	

注）C、Nは、基礎底面下1.0mの平均粘着力、N値



注）支持地盤が硬岩の場合0.5mまで根入れ深さを浅くしてもよい。

（単位m）

第9図　土留擁壁標準断面図

④　横穴式石室の線刻壁画について

石室内部は昭和41年の発掘調査時に実測されてはいたが、開墾により玄室と羨道それぞれ一ヶ所の天井石が取り除かれた状況下のものであったため、この後設けられた見学用の施設を含めて再度実測作業を行ない第10・11図に示した。

また、今回の調査では石室内部の発掘調査は実施していないため、床面の板石張りの状況等については図版（第12図）を参考にして頂きたい。

実測図中に横穴式石室を構成する石材の種類と壁画の位置を記したが、主要な壁画の見られない部分には前述したように保護用の樹脂が厚く塗布されており、実測図に示したもの以外に線刻画が隠されている可能性もある。また、この樹脂により石材本来の質感が失われていたため、この樹脂の除去方法の検討も今回の事業計画に含まれていた。

残念なことに本市教育委員会には当時の工事の資料が保存されておらず、塗布後20年以上経過した樹脂の変質も考えられたため、東亜道路工業株式会社に樹脂成分の分析と、壁画に損傷を与えずにこれを除去する方法の検討を委託した。これに伴い、本市教育委員会担当職員と綿密な打ち合せが行われ、現地での樹脂サンプル採取と除去テストが行われ下記のような結果を得た。

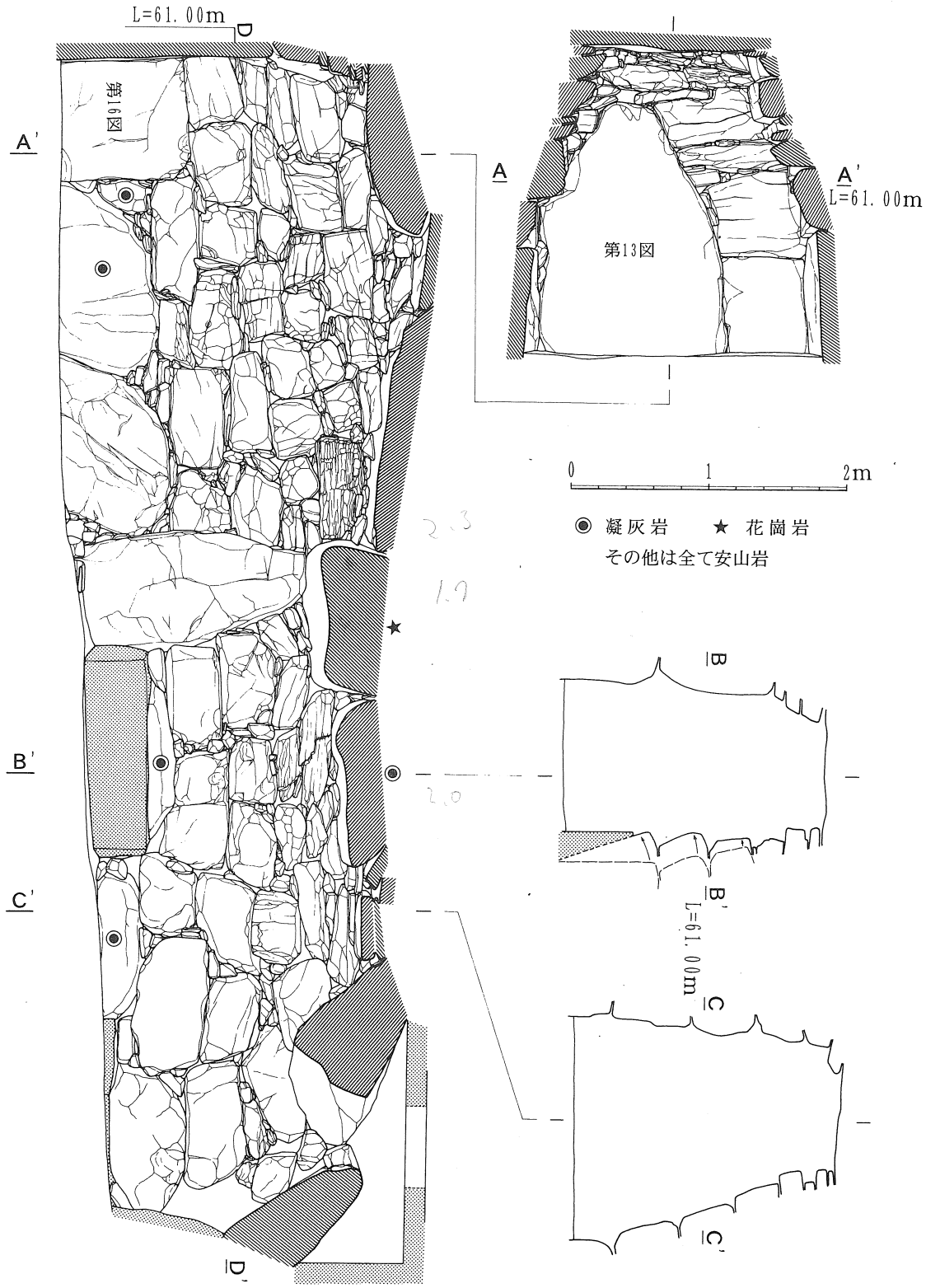
過去の塗膜時に下地岩石面が湿潤していたため、樹脂が完全密着していない部分が認められたので、そこから3㎠四方の大きさの樹脂塗膜片を採取した。このサンプルを用いて科学分析と有機溶剤等による溶解実験を行なった。

結論として、赤外吸収スペクトルでの測定の結果、芳香核・メチル基・メチレン基・エーテル基・水酸基（第2アルコール性水酸基と思われる）と思われる吸収スペクトルが検出されている。ただし吸収強度において、文献による標準スペクトルでの比較をすると、異なる点があるため断定することはできないが、一般的なエポキシ樹脂／ポリアミンの化合物と考えられる。

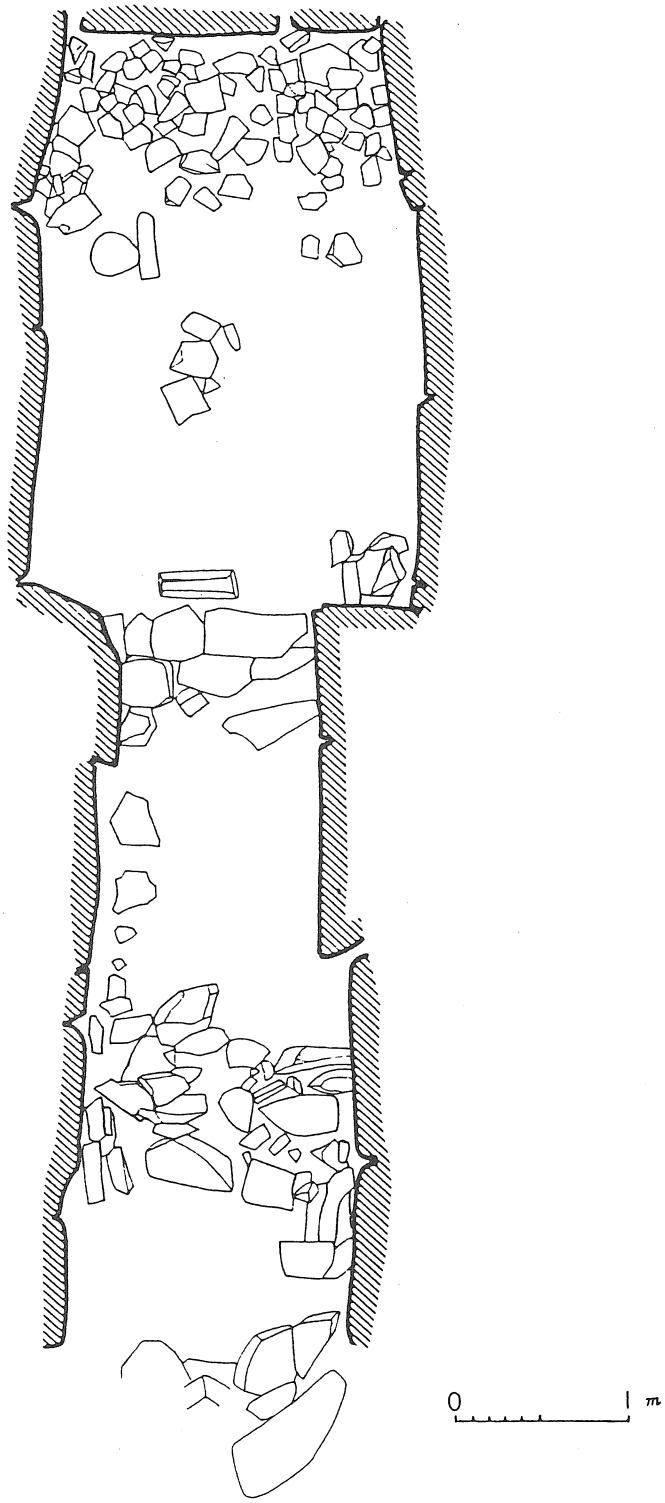
この結果を受けて、塗膜サンプルを有機溶剤中に浸漬させたところ多少膨潤し柔らかくなったが、現地で浸漬という作業は困難である。そこで塗膜除去剤を用いることが検討された。この方法により樹脂塗膜はウエス等で容易に拭き取れ、更に水洗することにより完全な除去可能であることが判明した。

そこで1992年11月4日、作業が容易であり壁画への影響が最も少ないと考えられる場所を選定し、石面15㎝四方が露出するように養生シートにて覆い、ハケにて埃等を取り除いた後にハケにて剥離剤を少量塗布した。約30分放置後、水を含んだウエスにて丁寧に遊離した樹脂を取り除いた。塗膜が厚い部分はこの作業を繰り返し、最後に水を含ませたハケで表面を洗うと樹脂塗膜がきれいに除去できたが、石室内部が密封状態で出入口が一ヶ所しかないため、作業員の人数に関係なく、ダクト等の設備を用いて強制的に空気の循環を図る必要がある。

第10図　横穴式石室実測図①



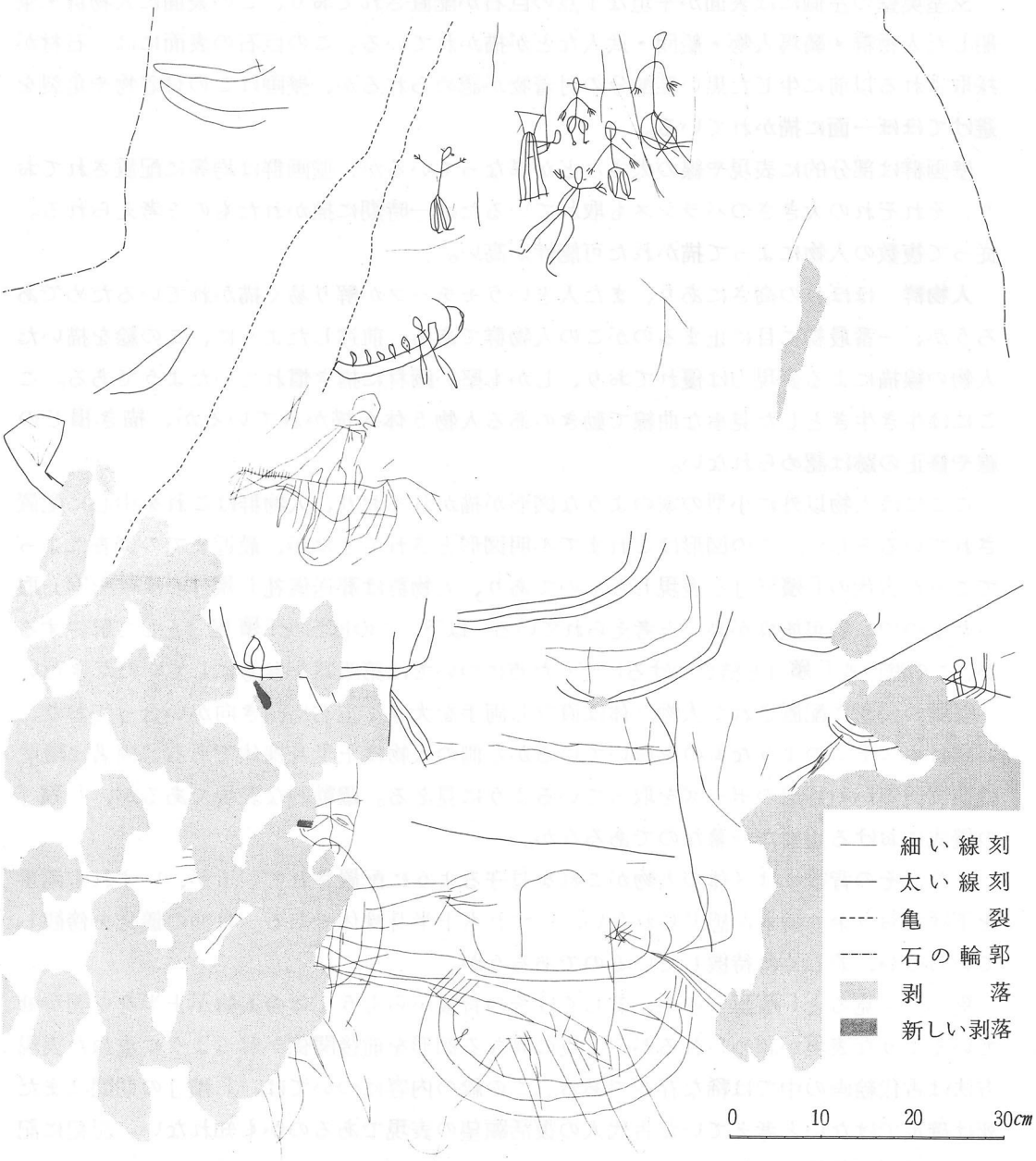
第11図　横穴式石室実測図②



第12図　横穴式石室床面実測図

「日本装飾古墳の研究」斉藤 忠（講談社 1973年2月）から

また、石室内部は近世頃に博打場として利用されていた形跡があり、寛永通宝等も出土している。　玄室奥部の壁画にはこれに伴うと考えられる焚火の痕跡が顕著であり、数箇所に集中して熱による変色と剥落が認められる。



第13図　玄室奥壁壁画実測図

殆どの剥落はこの熱によって生じたもののようであるが、壁画の一部が失われていることは大変残念である。また、発見当時の拓本と現況を比較したところ、この部分で剥落が進行していることが確認され、損傷部分への樹脂注入等の緊急処置が必要と感じられた。

以下、主要な壁画について解説する。

(1) 玄室奥壁の壁画群

玄室奥壁の左側には表面が平坦な1点の巨石が配置されており、この表面に人物群・乗船した人物群・騎馬人物・船団・武人などが描かれている。この巨石の表面には、石材が採取される以前に生じた黒い珪酸分の付着物が認められるが、壁画はこの付着物や亀裂を避けてほぼ一面に描かれている。

壁画群は部分的に表現や線の太さなどが異なっているが、壁画群は均等に配置されており、それぞれの大きさのバランスも取れているため一時期に描かれたものと考えられる。従って複数の人物によって描かれた可能性が高い。

人物群　ほぼ目の高さにあり、また人というモチーフが解り易く描かれているためであろうか、一番最初に目に止まるのがこの人物群である。前述したように、この絵を描いた人物の線描による表現力は優れており、しかも堅い画材に描き慣れていたようである。ここには生き生きとした見事な曲線で動きのある人物5体が描かれているが、描き損じの線や修正の跡は認められない。

ここには人物以外に小型の家のような図形が描かれており、人物群はこれを中心に配置されているらしい。この図形はこれまで不明図形とされてきたが、最近までの調査によってこれが古代の「殯屋」を表現したものであり、人物群は葬送儀礼「殯」の風景を写し取ったものである可能性が高いと考えられている。以下、この図形を「殯屋」として解説するが、この壁画を「殯」と結びつけるに至った点については第四章を参考にしていただきたい。

殯屋の前面に配置された人物2体は直立し両手を大きく左右に開き向かい合っており、いずれもズボンのようなものを履いているが左側の人物は上半身裸体である。両者は殯屋の前で何等かの特定のポーズを取っているように見える。躍動的な表現であるが、「殯」の儀式における重要な一幕なのであろうか。

また、その背後には3体の人物がこれを見守るように配置されているが、いずれも両手を下げており余り動きが感じられない。いずれも上半身裸体である。目前の儀式を傍観しているのか、若しくは待機しているのであろうか。

更によく見ると「殯屋」の中、若しくはその背後からもう1体の人物が上半身を覗かせているような表現が認められるが、2点の異なる図形を前後関係が解るように重ねた表現方法は古代絵画の中では稀な存在である。この絵の内容については、「殯」の期間はまだ死は確定ではないと考えていた古代人の復活願望の表現であるのかも知れない。記紀に記された神話が彷彿とされる。

乗船した人物群　6名の人物が乗船した船であるが、人物の数は“大勢”を表現したものであろう。この船の船首と船尾は上に向かって大きく屈曲し、右端の人物のところに2本の櫂が表現されており、モチーフは比較的大きな構造船であろうと考えられる。また、船の右側には舵のような三日月形の構造物が大きく描かれているが、船体と比較して高い位置に描かれており、別な構造物である可能性もある。ただ同様の表現が下から2段目の船にも認められることから、船に必要な一般的な構造物である可能性が高い。今後、船形埴輪や出土した構造船などとの比較が望まれる。

騎馬人物　騎馬人物を描いた線は、これより上に描かれた壁画群の線と比較して明らかに細く、また人物の体の特徴の表現方法も明らかに異なっており、第2の人物の存在が想定される。しかしながら表現力はやはり優れており、馬の体の特徴を含めて、面繋、手綱・鞍（前輪・後輪）・鐙・障泥などまで丁寧に表現されている。

人物の頭部は大きく甲か冠を被っているかの如く、頭部を包むような半円で覆われている。

船団　かなりの数の船が描かれているが上段の船とは異なり乗船した人物は認められない。中段右端に描かれた船にのみ櫂を操る人物が描かれているが、中央が剥落しており詳細は不明である。また、騎馬人物と同様の細い線の船も認められる。

幾つかの船には櫓が認められるが、大半の船は2～3条の線のみで簡単に船体だけを表現したものである。これに対して最下段の船は大きく丁寧に描かれ、多数の櫓の表現も認められる。この線刻画は石室床面から10㎝程のところに掘かれている。壁画の実測作業の際に感じたことであるが、現状でこの位置に均整の取れた線で絵を描くことは大変難しく、石室構築以前、つまりこの石が立てられる以前に描かれていた可能性も考えておく必要がある。第四章でも紹介するが、市内の装飾古墳の中には構築以前に壁画を描いたことを証明できる資料も確認されている。

武人　奥壁のモチーフは大半が共通したスケールで描かれているのに対して、下段左側には大きな武人図が描かれており異様な感じがする。他の全てのモチーフの表現力が優れているので、服装や装飾品の詳細が表現されていた可能性が高いが、残念なことにこの部分は剥落が著しくその大半が失われている。

また、この巨石の左上方の亀裂の外側にも船と思われる幾つかの線刻画や意味不明の図形が認められる。他の部分と比較して表現力が劣ってはいるが、後世の落書とも考えられず比較分析に苦慮する。

壁画全体の意味は一般的な古墳壁画の解釈と同様に鎮魂が主な目的と考えられるが、殯らしい表現と船の多さは特異である。

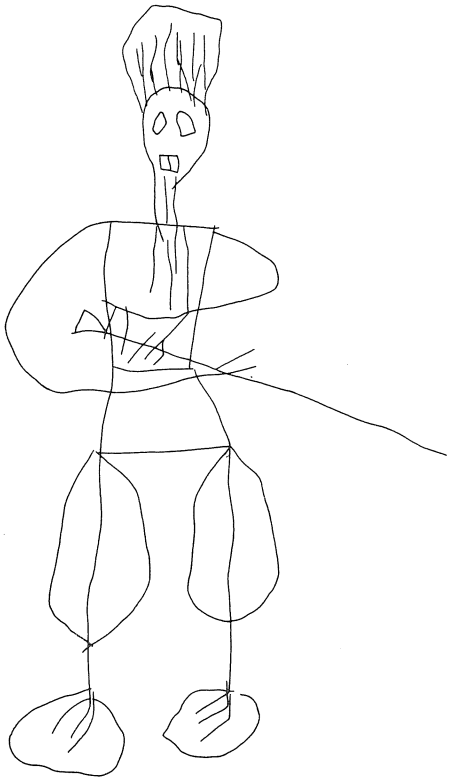
(2)　玄室西壁の武人壁画

奥壁の壁画群同様に優れた線刻壁画が玄室西壁最下段中央にも描かれている。極めて細い優美な曲線と直線の組合せで描かれた太刀佩きの武人図である。奥壁と比較して一面に小さな凹凸のある面であるにもかかわらず、無駄な線や描き損じの線などは全く認められない。

恐ろしげな顔面、頭部には髷か冠が表現されている。胸元には髭か首飾りらしい表現も認められる。腰にはベルトを締め、両手は腰の太刀に触れている。太刀は柄頭が逆三角形に膨らみ、頭椎太刀か環頭太刀のような装飾の施されたものであることがわかる。左手の指の間に鍔らしい表現もある。

上着は股くらいの高さで直線的に終わり、下には裾を絞ったズボンを穿き、足元には沓か下駄が丸く表現されている。見事である。

また、発見当時の調査の際に玄室西壁中段奥壁側と羨道部西壁開口付近最下段にも同様の壁画が残されていたことが当時の資料から解るが、現在は樹脂のため壁画は判別し難い。

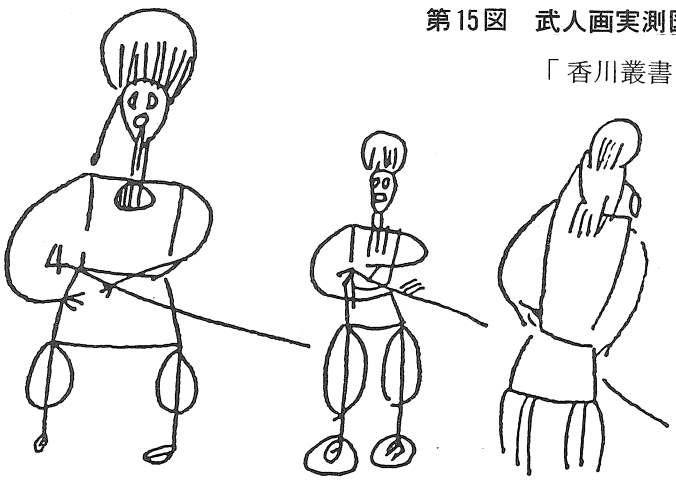


0　5　10 cm

第14図　玄室西壁武人画実測図

第15図　武人画実測図

「香川叢書（考古編）」から



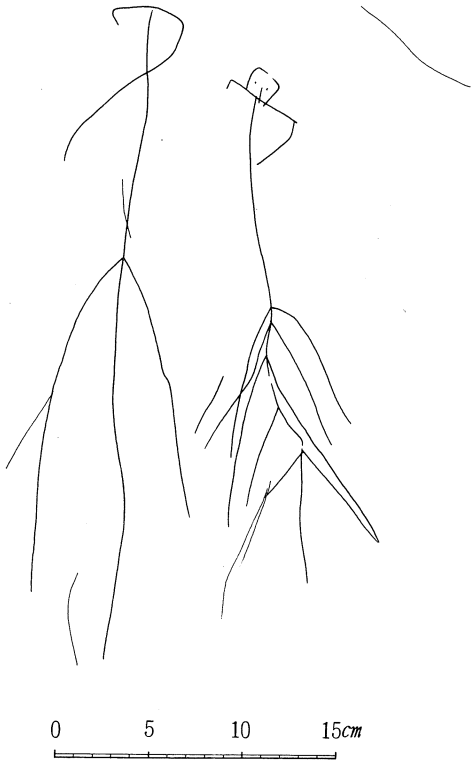
(3)　玄室東壁の不明壁画

玄室東壁最下段奥壁側の石材には多少表現の異なる相似図形が２点並べて描かれているがモチーフは不明である。人物のようにも植物のようにも見える。

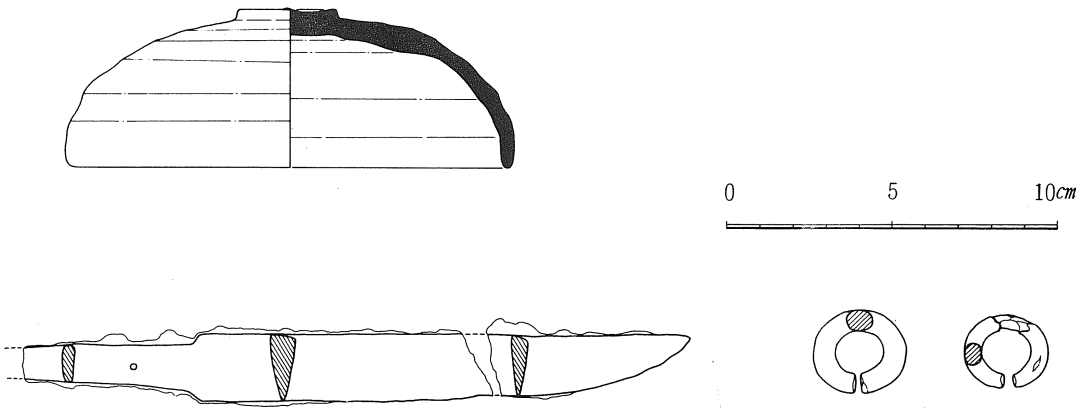
樹葉か樹木（若しくは小枝）を表現した線刻壁画は市内にも多く認められることから、その意味の解明が注目される。

⑤　出土遺物について

前述したように近世まで人の出入りが頻繁であったようで、殆どの副葬品は失われていたが、発見当時に行なわれた発掘調査によって、高坏の蓋・刀子・耳環が出土しており善通寺市立郷土館に保存されている。



第16図　玄室東壁不明壁画実測図



第17図　副葬品実測図

参考文献　「香川県宮が尾古墳調査概報」松本豊胤（古代学研究第45号 1966年9月）
「日本装飾古墳の研究」斉藤 忠（講談社　1973年2月）
「善通寺宮が尾古墳の線刻壁画」丹羽佑一（教育香川、59年夏期号）

第三章　保存整備事業の展望

遺構は当初史跡指定された範囲内に納まっているようであり、史跡指定範囲の変更等の必要性は無いようである。現在では古墳築造当時の地形は周辺の自然地形と伴に厚い土砂の下に埋没しているが、遺存状況は比較的良好であることが判明した。

この調査結果や整備方針は平成4年11月12日に開催された史跡有岡古墳群調査整備委員会で検討され、下記のような結論に至った。

史跡有岡古墳群調査整備委員会

会　長	善通寺市文化財保護審議会委員	松浦　修
副会長	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長	町田　章
委　員	香川大学農学部教授　（造園学）	吉田重幸
委　員	香川大学教育学部教授（考古学）	丹羽佑一
（指　導）	文化庁記念物課　文部技官	加藤允彦
	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財調査センター 保存工学研究室 主任研究官	内田昭人
	香川県教育委員会　文化行政課	
（事務局）	善通寺市教育委員会 文化振興室	

湧水や湿度の変化による風化等から壁画を保存するためには、通気を良くし温度・湿度を一定に保つ必要があり、今後史跡を活用する面からも、古墳を構築当時の状況に復元することが必要であると考えられた。そこで『善通寺市が史跡指定範囲を公有地化するための国庫補助金交付申請を行う』『公有地化された後に発掘調査を実施し、墳丘周囲の不要な客土を除去する。そして早急に周囲の残地との間に土留擁壁工事（事前にボーリング等による地質調査を実施し構造物の規模を検討）を実施し更に墳丘の復元工事を実施する』『周辺の農作物に対しての土地改変後の影響について調査検討しておく』『史跡指定範囲が孤立せぬように史跡と県道の間の未指定の土地は善通寺市が単独で公有地化し、整備後の史跡の活用を図れるよう配慮する』『壁画の保存のため実物の常時公開は難しいため、史跡内に壁画のレプリカや説明板等を設置することを検討する』等の意見が出された。

今後の宮が尾古墳保存整備事業は以上のような方針で進められることになったが、現状では国庫補助による公有地化は希望であるため、事務局では地権者との交渉及び文化庁や香川県教育委員会との協議から開始することとなった。しかしながら、緊急性のある剥落防止処置、羨道部東壁の変形部分の処理、樹脂の除去等問題は多く、これらの事業を円滑に進めるためには、今後も調査整備委員会や関係機関と慎重に協議を続ける必要がある。

第四章　線刻壁画の意味（考察）

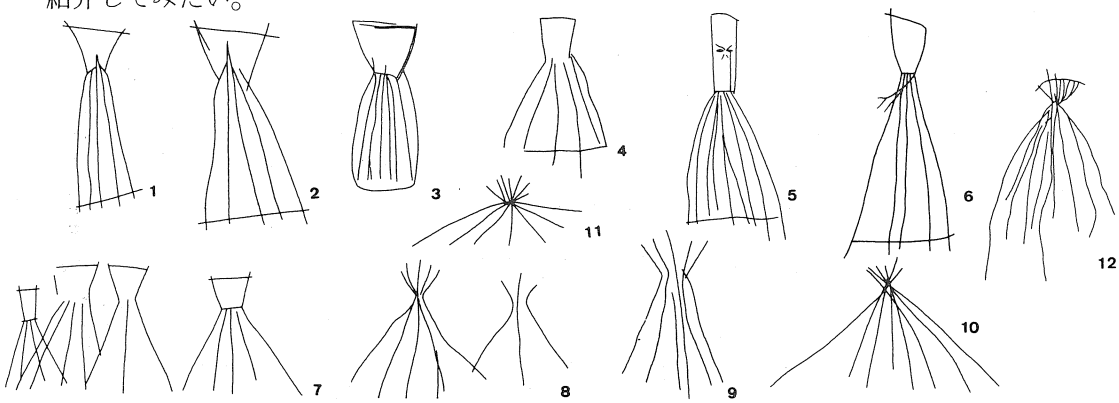
極めて優れた表現力によって描かれた宮が尾古墳の線刻壁画は、全てのモチーフが非常に解り易いものであり、国内の装飾古墳の中でも特筆できるものとして様々な資料に紹介されてきたが、本墳発見後も市内及び坂出市で同様の装飾古墳の確認が相次いでいる。

これまでに線刻壁画を有する横穴式石室墳が同一平野内の複数の地区に群集しているばかりでなく、複数の古墳にまたがり同一のモチーフが数多く存在することが確認された。これは驚くべき事実であるが、更にこの中には線刻画が石室の構築以前に描かれたことが証明できる極めて稀なものも含まれている。

顔料等による壁画は科学分析等による確認作業が可能であるが、線刻壁画は当時のものと後世に落書として描かれたものとを区別することは極めて難しい。線刻が古いから、モチーフが古代のものであるから、既に確認されているものと同様のモチーフであるからというだけでは、後世の模刻等も予想されることから根拠とはならない。しかも後期古墳の大半は既に盗掘者の侵入があり、開口しているものについては人の出入りが頻繁であることが考えられ、怪しいものや意味を読み取ることの出来ない線刻画等については極めて慎重にならざるを得ず、公式な報告がなされていないものも少なくないのが現実である。

しかしながら本市のものについては同一石室内のみならず、かなり離れた古墳を含めて複数の石室内に同一のモチーフが確認されているため模刻とは考え難い。しかもその共通モチーフの幾つかが構築時かそれ以前に描かれたことを証明し得る資料も確認されているのである。

そこで今回の宮が尾古墳の再調査を契機に、この地が線刻により装飾された古墳が群集することを前提に、これらの線刻画の意味について再考された内容を本紙面をお借りして紹介してみたい。



第18図　線刻壁画の共通モチーフ（殯屋）実測図（1～5，7～10は約1／4，6は約1／8に縮小）

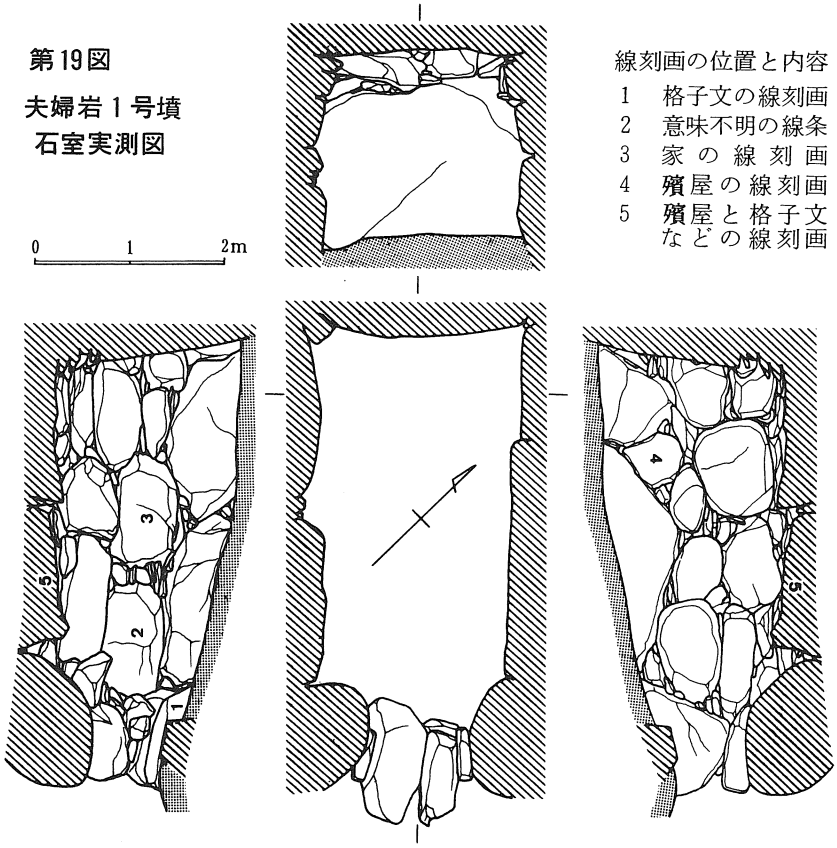
1宮ガ尾古墳玄室　2夫婦岩1号墳玄室　3夫婦岩1号墳天井　4夫婦岩1号墳天井
5岡5号墳羨道　6サギノクチ1号墳玄門　7岡5号墳羨道　8岡5号墳羨道
9岡5号墳羨道　10岡5号墳羨道　11岡6号墳羨道

宮が尾古墳の壁画発見と前後して、岡古墳群の幾つかの横穴式石室で、宮が尾古墳奥壁の人物群に囲まれた“小さな家”のような図形によく似た線刻画が知られるようになった。岡５号墳に関しては「新偏香川叢書考古篇」(1983年3月・香川県教育委員会)や「日本の古代遺跡８香川」(1983年3月・保育社 廣瀬常雄著)に“インディアンテント風の家”として紹介されているが、その他にも周辺に現存する７基の古墳のうち６基に線刻画が確認されている。このうち４基に“小さな家”の相似形があること、これ以外にも複数のモチーフが共通していることも確認された。

特に興味深いのは岡古墳群最奥の大麻町字岡夫婦岩25611－５に所在する夫婦岩１号墳に見られる線刻壁画群である。ここの(玄室東壁画の“小さな家”は、同一人物によって時を同じくして描かれたと思われるほど宮が尾古墳のものと酷似している。※)

また玄室天井部にも“小さな家”が多数描かれているが、天井石に見られる“小さな家”群は※の関係とは異なる。面白いことに同一人物によって同一モチーフが一箇所に描かれているにもかかわらず、それぞれの表現が少しづつ異なっているのである。しかも、天井壁画はその位置から天井石架設前に既に線刻されていたことが証明できるものが含まれており、古墳築造と装飾の関係が明確にできる貴重な資料でもある。このようなことから、本墳の壁画群は“小さな家”の正体を解明する上で重要な手掛かりになるものと期待された。

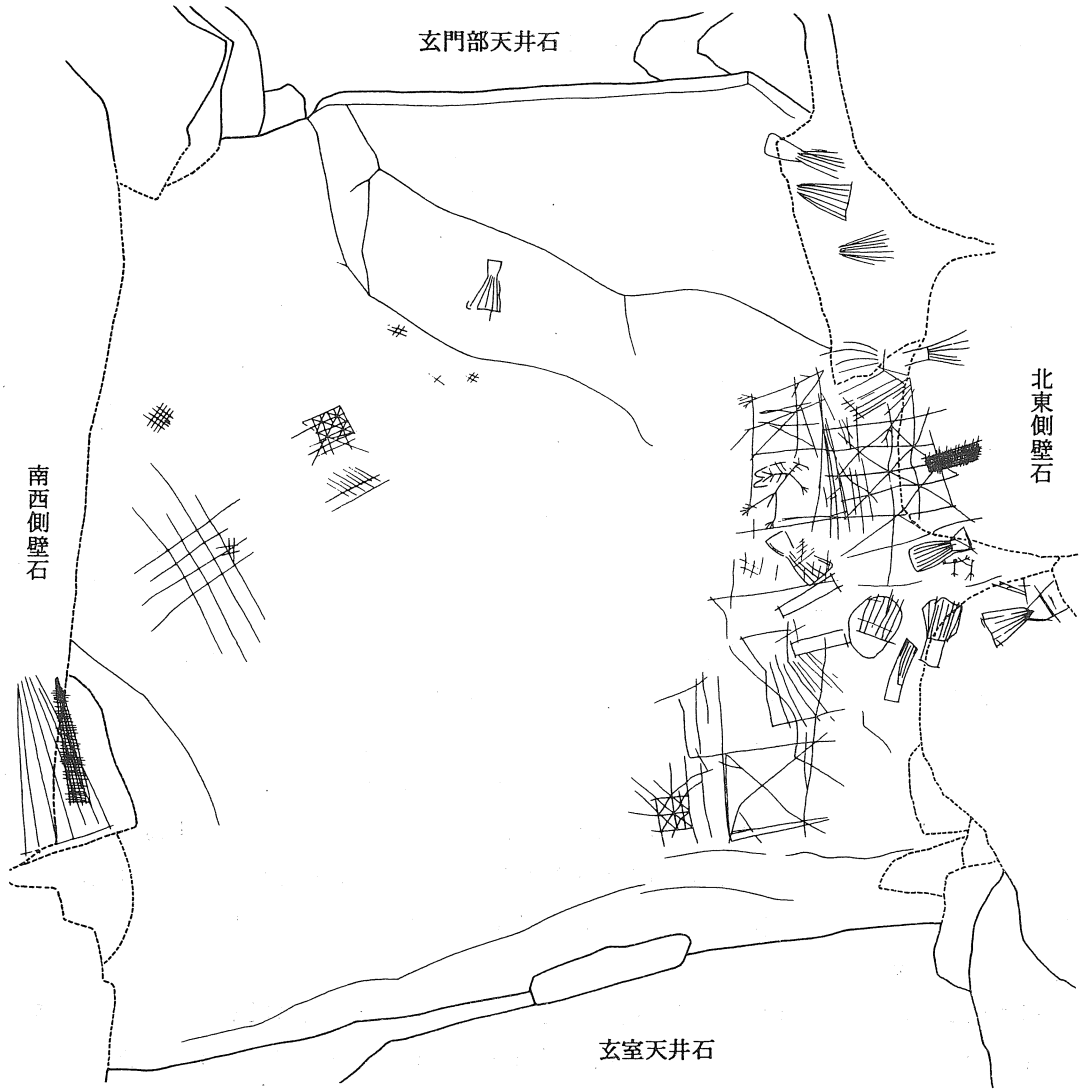
この状況から岡古墳群の幾つかの古墳に描かれた多数の“小さな家”は、多少異なる形であっても同一対象物を描いている可能性が高い。古墳の装飾には、鎮魂・守護・封鎖等の根本思想があったことが考えられており、この“小さな家”はその時代に存在した、葬送儀礼に必要不可欠な構造物を描いた可能性が高いのである。



第19図
夫婦岩１号墳
石室実測図

ここでこれを殯屋の構造と併せて考えてはどうだろうか。殯屋は古代の葬送儀礼に不可欠な構造物である。記紀に登場する有名な殯は天稚彦が死んだ時のものであり、殯の様子と併せて殯屋が「太刀で切り倒し蹴飛ばした」程度の大きさであることが描かれているが、この様子は宮が尾古墳奥壁の人物群の表現と合い通じるものがある。しかもこの形態は民俗事例として今も残るモンドリ型（円錐形）モガリと極めてよく似ている。

過去の報告例の中で古墳主体部内部の装飾と殯の習俗とを結びつけた報告例は数少ないが、『虎塚壁画古墳 勝田市史別編Ⅰ』（勝田市史編纂委員会1978年3月）では、石室内の彩色壁画を「喪屋の内部を写しとったものと思われる」としている。また、『高井田横穴群線刻画』（和光大学古墳壁画研究会 1978）では、当地区で確認された図形に似たものを



第20図　夫婦岩１号墳天井壁画実測図　　0　50cm

第21図　夫婦岩１号墳玄室側壁壁画（家）実測図

0　10cm

「サンギッチョ」とし、五来 重氏が『日本人の死生感』（季刊創造の世界73年９月）で、「竹や木の枝を集めて造った円錐形のまわりに布や縄を巻くだけの簡単な構造物を遺体に被せて霊魂の封鎖を目的とした殯屋の原型」について述べたことを紹介している。

五来 重氏は『先祖供養と墓』（角川撰書1992）の中で、「古代の殯のわずかな記録、現在残っている民俗としてのモガリから一つのつながり」と「中世の断片的な記録」を結び付け今のモガリを考えるとしているが、逆に今のモガリから古代の殯を知ることはできまいか。

丸亀平野部の北東端に位置する坂出市にも木の葉をモチーフとした線刻壁画を有する古墳が数基確認されている。この中の鷺のロ１号墳（木の葉塚）では石室内一面に樹葉が線刻されており、一部に船も描かれていることが報告されている。『坂出市加茂町木の葉塚の線刻壁画』古代学研究第92号（1983年３月井上勝之・玉城一枝）では「この地方が綾織の里であったことを関連させて養蚕のための桑の葉を貴重と考え、それを被葬者に具えたか桑の豊穣を祈った」とする意見と『高井田横穴群線刻画』（和光大学古墳壁画研究会1978）の「神の依代としての榊が祭儀に際して用いられる」ことと「特定の木の葉を意識して描かれたものではなく、常緑樹のもつ生命の不滅の意味と、落葉樹のもつ生命のよみがえりの意味とを合わせもった、あらゆる木の葉、ひいては樹木の根源的な生命の象徴」とする意見があることを紹介し、この古墳が新興勢力により築かれたものである可能性が高いことを考慮し、「その集団が持っていた特異な文化を木の葉という形で表現したのかも知れない」と結んでいる。

同様の樹葉の線刻は善通寺地区でも幾つか認められるが、五来氏は民俗学でいう古い殯の残存形態として「青山型モガリ」を挙げ、『古事記』『日本書紀』に登場する「青柴垣」「蒼柴籬」に榊（現在の榊）が使用されていたことを紹介している。当地区に見られる樹

葉や樹木の表現は、竹や木の枝を集めて造られた殯屋の構造を表現したものではあるまいか。そして、同時に多くみられる格子や柵状の線刻画は殯の一形態である忌垣型を表現したものではあるまいか。

少なくとも、当地域に散在して群集する後期古墳群の線刻画は、殯屋そのものと殯屋に使用されていた素材をモチーフとしたものである可能性が高く、横穴式石室内の装飾と殯という習俗との関係の深さを考えざるを得ない。

そこで、埋蔵文化財としての殯と断片的に残されている殯の記録を照合する作業や、他の地区の装飾古墳等との比較研究を試みたいと考えるが、石室内部の石製構造物等と殯屋の構造との比較、宮が尾古墳奥壁に描かれた儀式の様子と須恵器の装飾※に見られる人物群の行為との比較作業など課題は多い。

また、当地区にはこれだけまとまった資料がありながら、線刻位置及び位置とモチーフの関連は不明である。問題点も多く残る。

※ 装飾須恵器は日常生活の器物ではなく葬送儀礼用の祭具と考えられる。装飾の中には直立し相対し向かい合い両手を組み合った人物の表現が多くあるが、これは力士と分析されている。

モンドリ型モガリ（滋賀県大津町）
～円錐形モガリ～

青山型モガリ（滋賀県多賀町）

第22図　殯の残存形態

この写真は「先祖供養と墓」（角川撰書－228 五来 重著）に掲載されたものを、撮影者である上別府 茂氏の御好意で掲載させて頂いた。紙面をお借りして謝意を表します。

善通寺市

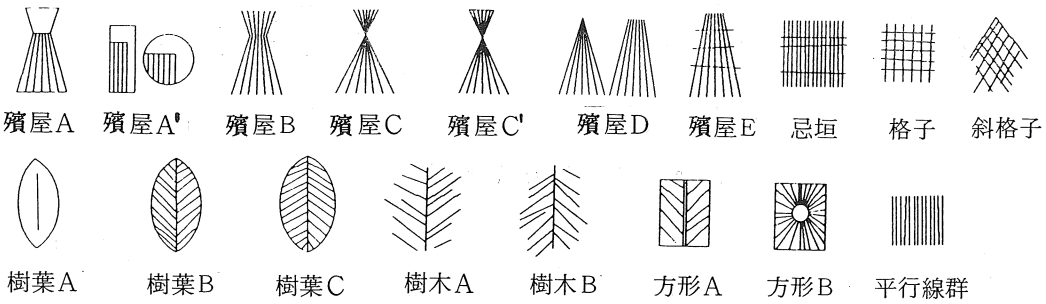
※特に多く描かれているモチーフ

古　墳　名	壁画の内容（数）と【線刻位置】
宮が尾古墳	【羨　道】武人(1)・平行線群(1) 【羨門付近上部】平行線群(1)・亀甲文(3) 【玄　室】**殯**屋A(1)・人物(6)・※船(13)・騎馬人物(1)・武人(2)
岡　5　号　墳	【羨　道】※**殯**屋A(10)・**殯**屋A'(1)・**殯**屋B(4)・**殯**屋C(2)・**殯**屋D(8)・忌垣(2) 斜格子(4)・大型住居(1)・平行線群(6)・木葉A(3)・樹木B(3) 【玄　門】　船(3) 【玄門上部】**殯**屋E(1) 【玄　室】※**殯**屋A(3)・**殯**屋D(8)・**殯**屋E(1)・平行線群(1)
岡　6　号　墳	【羨　道】**殯**屋C(1)・不明(1)
岡　10　号　墳	【羨　道】**殯**屋D(1)・忌垣(1)・木葉A(2)・樹木A(1)・樹木B(1)・平行線群(1) 方形A(3)・方形B(1) 【玄門上部】**殯**屋E(1) 【玄　室】**殯**屋D(1)
岡　11　号　墳	【羨　道】**殯**屋A(1)・**殯**屋A'(1)・格子(1)・木葉A(1)・木葉B(2)・※樹木A(9) ※樹木B(6)・※平行線群(6)・方形A(1)
岡　13　号　墳	【羨　道】忌垣(1) 【玄　室】格子(1)
夫婦岩1号墳	【羨　道】破壊され散乱する羨道石材にも**殯**屋や忌垣が描かれている。 【玄　門】平行線群(2) 【玄　室】**殯**屋A(1)・忌垣(1)・住居(3) 【玄室天井】※**殯**屋A(8)・**殯**屋A'(2)・**殯**屋D(3)・※格子(7)・忌垣(1)・人物(1) 不明図形が多い ◎描き損じた箇所を削り修正した痕跡が認められる。
瓦谷1号墳	【玄　室】方形の囲いの中に人物(2)

坂出市

鷺の口1号墳	全体に多数の木葉B・木葉Cと**殯**屋C'(1)，玄室に船(3)が認められる。
山の神1号墳	羨道部に木葉と船が認められる。
綾織塚古墳	玄室に複数の木葉があるが不明瞭である。また**殯**屋E(1)が認められる。

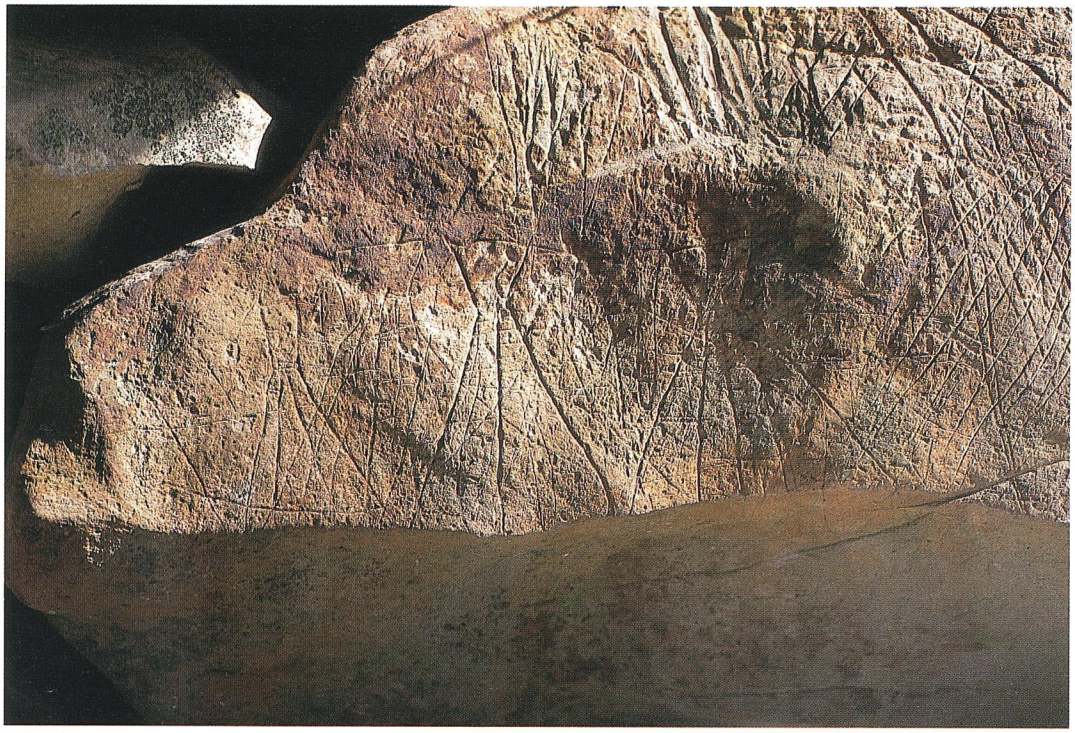
※木葉や樹木は葉脈や枝が上向きのもの（樹葉B・樹木A）と下向きのもの（樹葉C・樹木B）が意図的に組み合わせて使用されているようである。



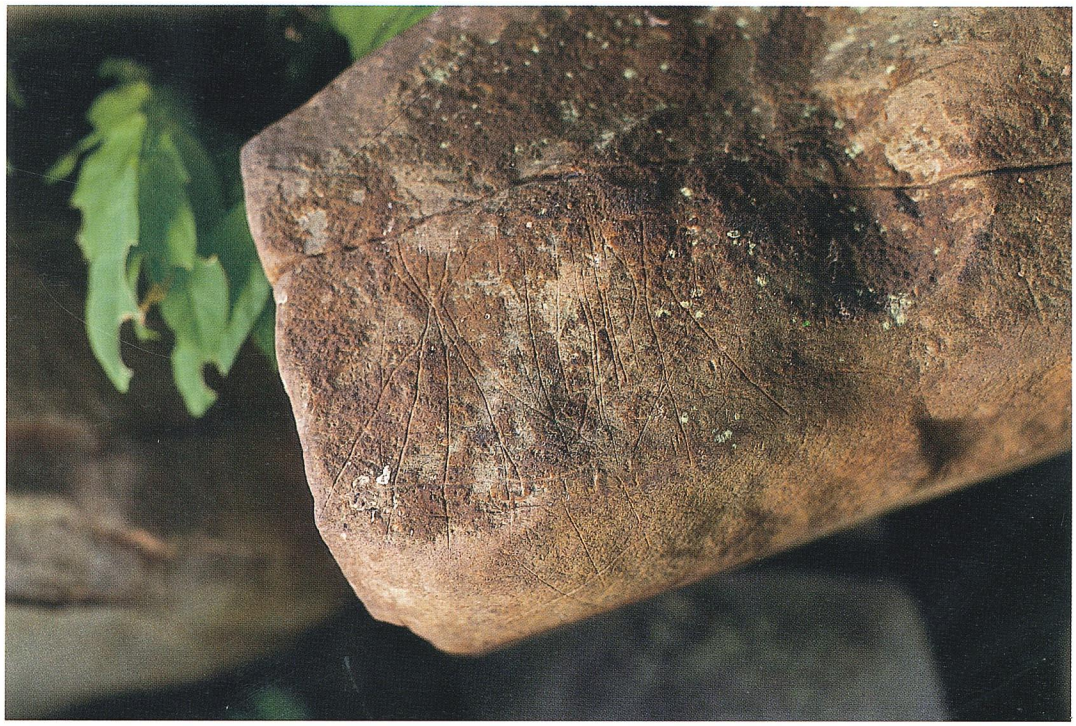
第23図　県下の装飾古墳一覧

第24図　夫婦岩１号墳の天井壁画

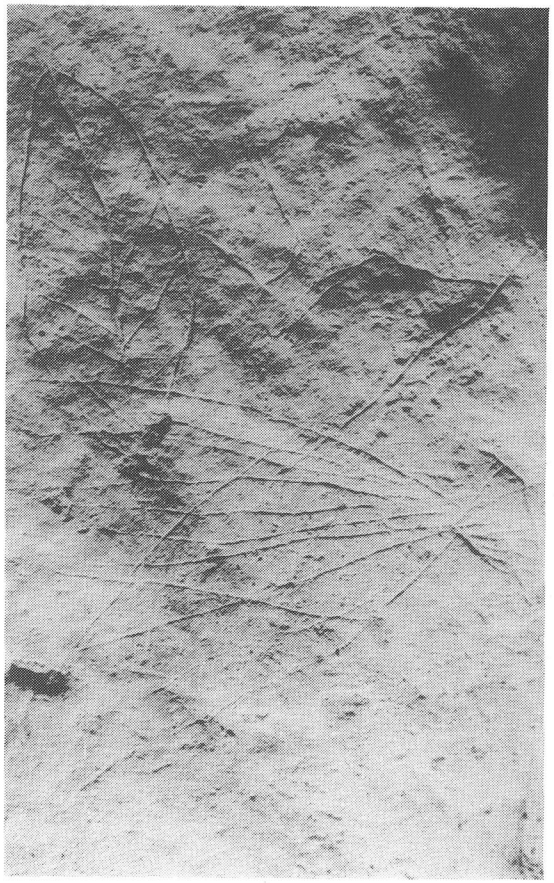
第25図　夫婦岩１号墳玄室壁画・部分（殯屋Ａ）



第26図　岡５号墳羨道壁画・部分（殯屋Ａ）



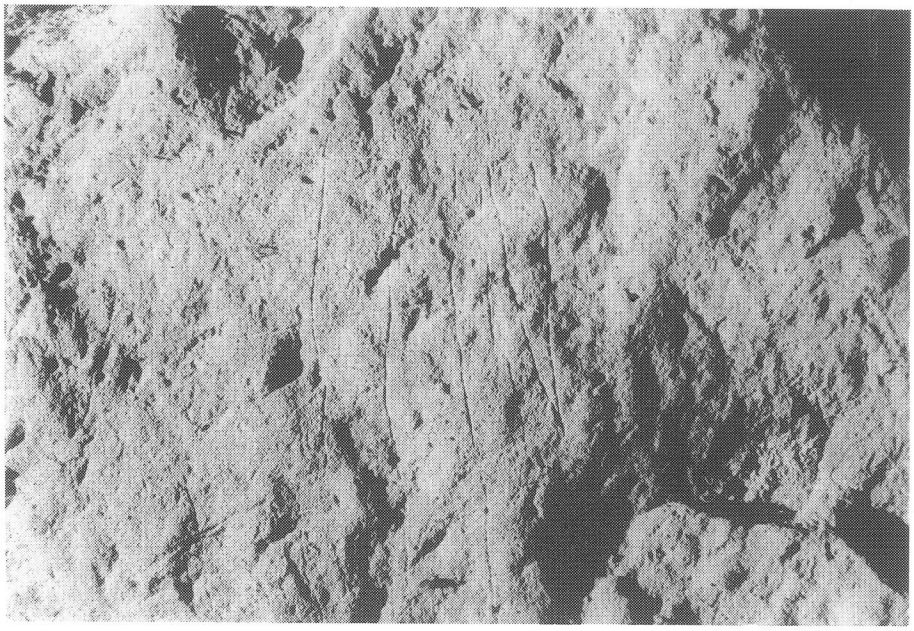
第27図　岡５号墳羨道壁画・部分（殯屋Ｂ）



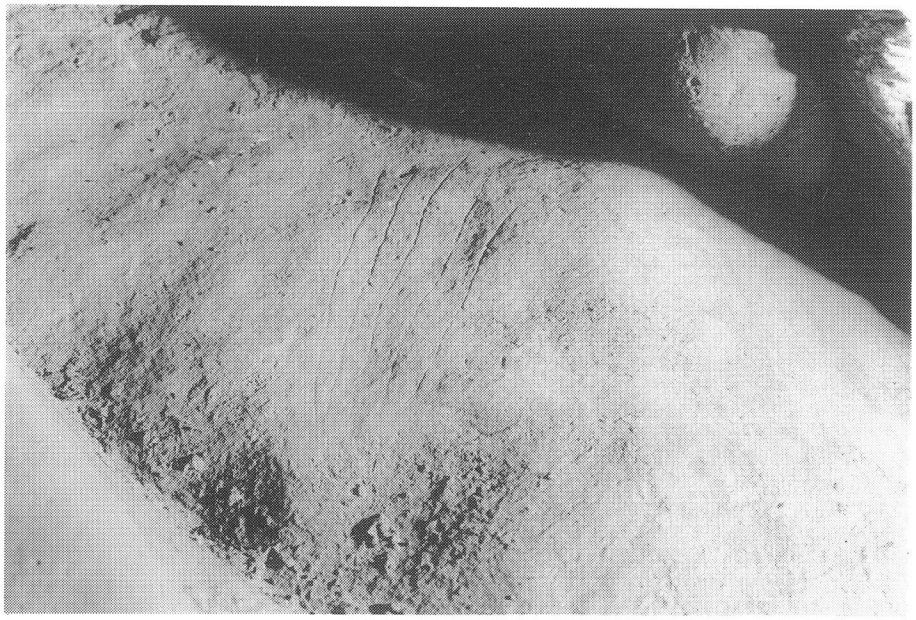
第28図　鷺の口１号墳玄門部壁画
（樹葉Ｂと殯屋Ｃ'）

第29図　綾織塚羨道部壁画（樹葉Ｂ）

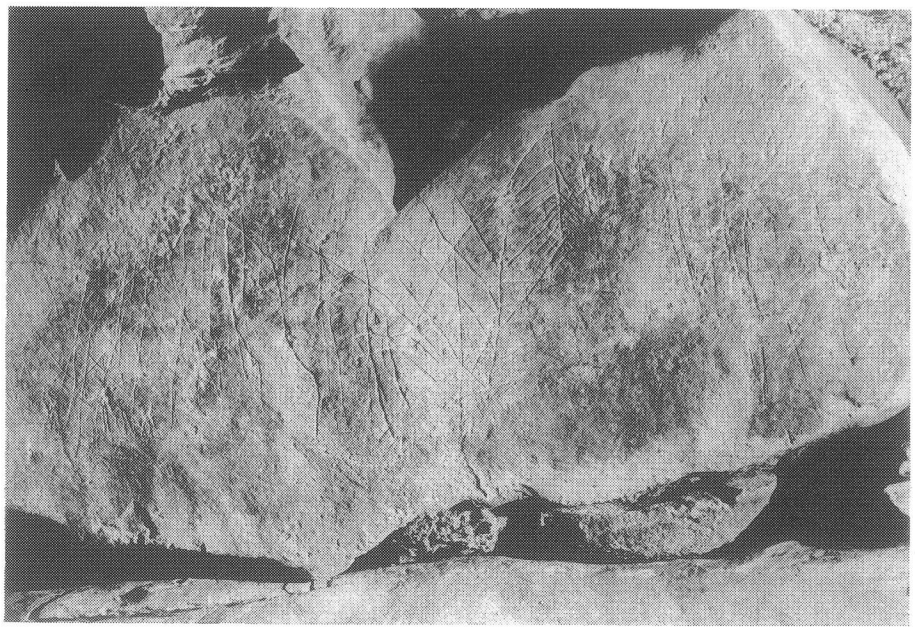
第30図　岡11号墳羨道部壁画（樹葉Ｂ）



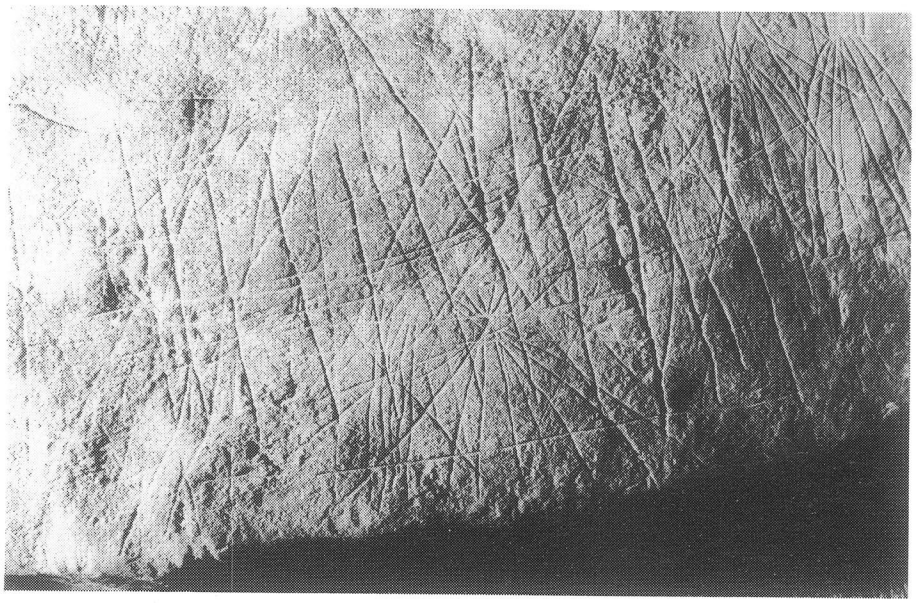
第31図　綾織塚羨道部壁画（殯屋Ｅ）



第32図　岡10号墳玄門上部壁画（殯屋Ｅ）



第33図　岡11号墳羨道部壁画（樹木Ａと樹木Ｂ）



第34図　岡５号墳羨道部壁画・部分（忌垣と殯屋Ｃ）

第五章　ま　と　め

昭和61年7月14日、善通寺市仙遊町で弥生時代後期の箱式石棺が発見され、これを構成する全ての安山岩の表面が呪術的性格を持つと考えられる線刻画で覆われていたことから全国的注目を集めた。描かれていたモチーフは入墨をした弥生人の顔や鳥の絵、直弧文状の模様など様々であるが、これらの模様が箱式石棺（墓）に描かれていたということは線刻画の利用目的を考える上で大変興味深い資料である。

仙遊遺跡の線刻画と市内の古墳群の線刻画との間には大きな時期差があるため、直接両者を同じ習俗として結びつけることは難しいが、これは線刻画を持つ最古の装飾石棺墓であり、その装飾の目的は共通していると考えても良いように思われる。

調査によって線刻画は箱式石棺が組み上げる以前に描かれていることが判明しており、周辺の状況などから、箱式石棺石材に線刻画を描くという行為が当時の葬送儀礼の手順に従って、採取してきた石材に手を加える作業と併せて墓の構築に伴い墓壙付近で行われたのではないかと考えられる。これは弥生時代後期に発生し、古墳時代に頻繁に使用された特殊な幾何学模様の性格や古墳装飾の意味を考える上でも必要不可欠な資料である。

またこの地に古代の線刻画が数多く残る点については、絵や記号を描く習俗が存在したことに加えて、画材に恵まれていたということも挙げられる。

同一平野部においても場所によって入手可能な石材の種類が異なる。石室石材にはそれぞれの場所の地質環境が反映されており、花崗岩・凝灰岩・砂岩など多様な石室を見ることができるが、花崗岩は硬く線刻には適さず、凝灰岩や砂岩は軟質であるため表面の風化が早く壁画が残り難いため、線刻壁画が確認される壁画は全て讃岐岩質安山岩である。

従って壁画の有無によらず、このような習俗がかなり広い範囲に存在していた可能性が高く、善通寺地区では殯屋、坂出地区では樹葉文が多く描かれている点については、根本思想が同一であっても一方は殯屋そのものの構造に、他方は殯屋に用いられる樹葉にその力の源を求めていたようである。表現の相違点についてはシャーマンのテリトリーを考慮すれば良いであろう。これが事実であるならば、他地域においても類似した事象が残されている可能性が高く、今後の研究が期待される。

殯は限られた階級のものとしてしばしば文献にも登場する。殯という習俗は巨大な墳墓を造る古墳時代に開花し盛興すると思われるが、殯家は仮設の構造物であるため遺構として検出される可能性は極めて小さく、宮が尾古墳の線刻壁画のような視覚的資料は極めて貴重である。しかしながら市内に残る宮が尾古墳以外の装飾古墳は開口したままであり、残念なことに壁画面に新しい落書が年々増えている。

本文中に掲載した装飾古墳についての正式な再調査を実施し、改めて報告するとともに早急な保存措置の必要性を痛感している。

図　　版

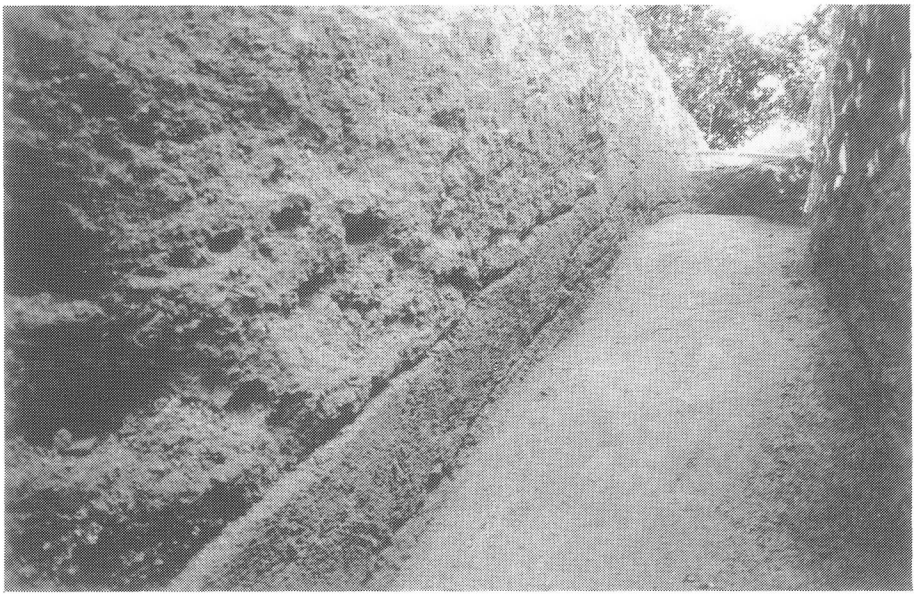
発掘調査記録写真

第35図　宮が尾古墳遠景（北から）

～正面の果樹園中に墳丘が埋没している。～

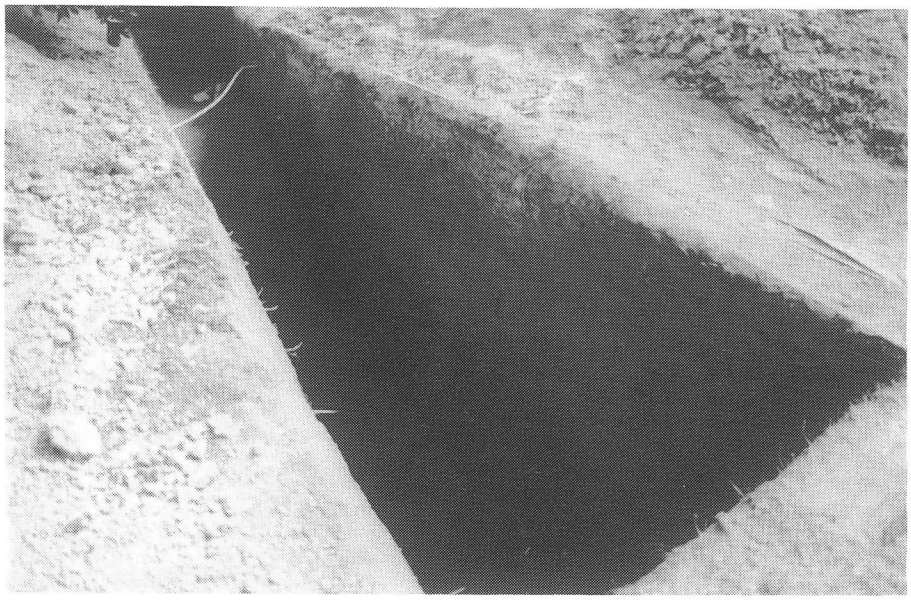
第36図　宮が尾古墳開口部上部の覆屋と周辺の現状（西から）

第37図　第１トレンチ完掘状況・全景（北から）

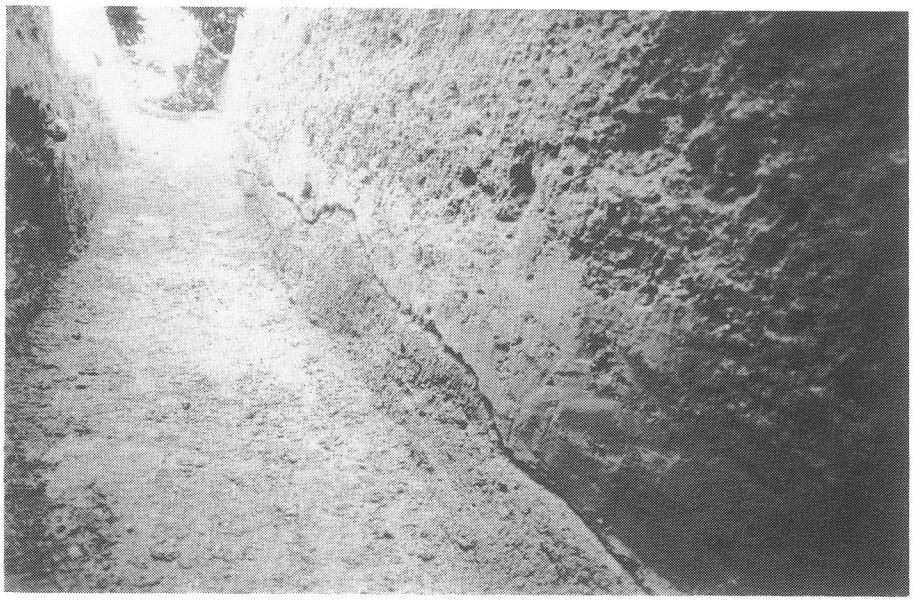


第38図　第２トレンチ完掘状況（東から）

～検出面が墳丘上部～

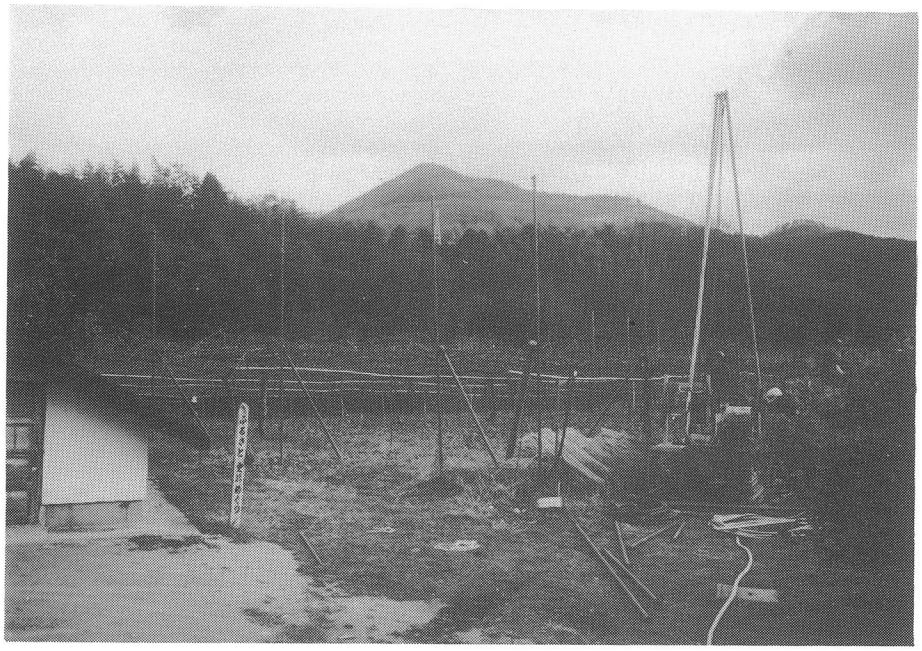


第39図　第３トレンチ完掘状況・全景（西から）



第40図　第３トレンチ完掘状況（西から）

～検出面が墳丘上部～



第41図　ボーリング調査作業風景

第42図　石室内樹脂除去試験作業風景

史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）調査報告

～史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）
保存整備事業に伴う発掘調査報告書～

平成５年３月31日発行

編集　香川県善通寺市文京町２－１－４
発行　善通寺市教育委員会文化振興室

印刷　㈱　四　国　工　業　写　真